

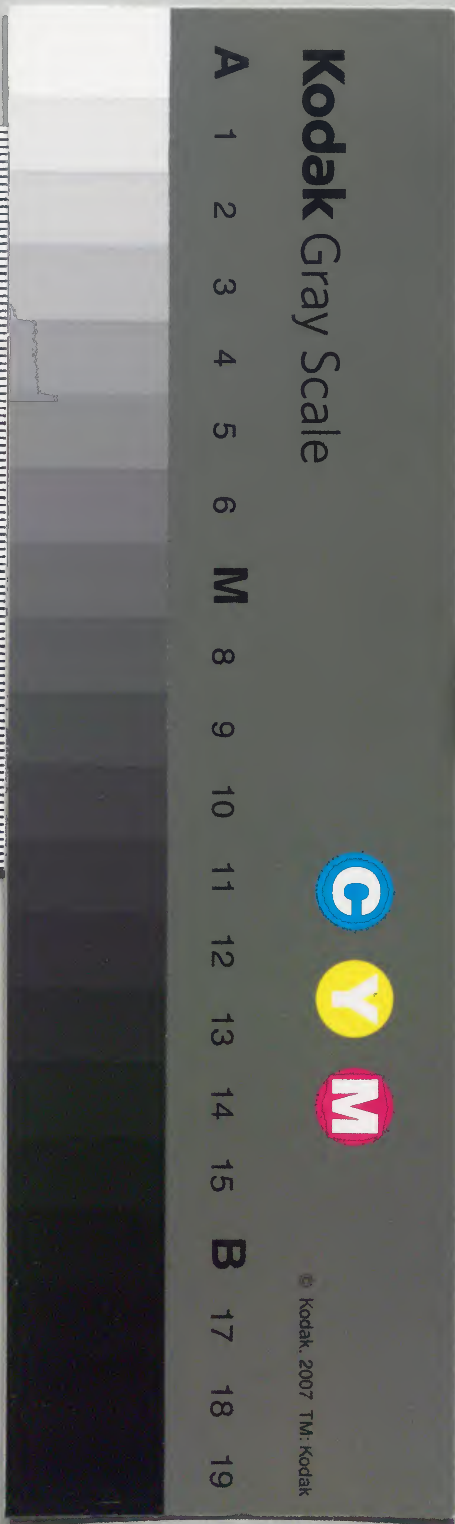
日本略史

三

				和書門	
				三四六三號	
				五函	
				一册	
				四册	

内閣文庫				和書	
				三四六三號	
				一册	
				三函	
				二册	

内閣文庫	
番號	和 3463
冊數	4 (3)
函號	139 156



裏面記載のない箇所は省略

二千二百四十二年 武田氏滅
 同年 明智光秀信長ヲ弑ス
 二千二百四十四年 小牧ノ戰
 二千二百四十七年 豊臣秀吉西國ヲ平ラク
 二千二百五十年 秀吉北條氏ヲ伐ツ
 二千二百五十二年 朝鮮ノ役起ル
 二千二百五十八年 秀吉薨ス

日本畧史卷之三

笠間益三編輯

二千百三十九年 亥十一月義政退テ東山ニ居ル
 爭乱ヲ以テ意ニ加ヘス諸國ノ強臣往々乱ニ乘
 シテ國ヲ奪フ者アリ義政置テ問ハス是ヨリ天
 下ノ武人復足利氏ニ朝セヌ山名氏父ニ其黨興
 ノ諸將諸方ニ散在シ漸ク衰滅ニ就ク獨リ細川
 上杉兩氏東西ニ雄張スル故ノ如シ
 二千百四十六年 丙是時扇谷ノ上杉定正相模大
 場ニ居ル山内ノ上杉頭定上野平井ニアリ八州

ヲ管領マ八州推シテ山内公ト稱ス定正、臣太
田道灌才畧アリ河越江戸藏ノ二城ヲ築キ大ニ
恩威ヲ布ク八州ノ將士山内ヲ背テ扇谷ニ歸ス
ル者多シ頭定之ヲ患ヒ陰ニ道灌ヲ除キ以テ定
正ノ股肱ヲ絶ント欲ス乃チ反間ヲ縱テ盛ニ道
灌ノ材武士心ヲ得ルヲ稱ス定正猶之ヲ忌ム道
灌ヲ召シテ酒ヲ賜ヒ人ヲシテ之ヲ刺シ殺サシ
ム頭定聞テ大ニ喜テ曰定正吾術中ニ隔ル復畏
ルニ足ラス
二千百四十七年打長享ト改元ス九月大將軍義

尚 六角高頼ヲ召ク高頼至ラズ義尚自カラ將ト
シテ之ヲ討ス高頼逃走ル義尚留テ鉤ノ里_{近ニ}
アリ
二千百四十九年_巳延徳ト改元ス三月義尚鉤ノ
里ニ於テ病テ薨ス義尚學ヲ好ミ嘗テ藤原兼良
ニ從ヒ治道ヲ講ス兼良為メニ樵談治要ヲ著レ
テ之ニ典フ薨スルニ及テ遠近哀惜セサルナシ
義尚號ニ名ヲ義崇ト改ム嗣子ナシ義政義親ヲ
美濃ヨリ召シ其子義林ヲ養テ嗣トス後ヲ名ヲ
義植ト改ム

二百五十五年庚戌正月前大將軍義政薨ス七月義
植大將軍ニ任ス
二千百五十一年辛未正月前大納言義視薨ス四月
左兵衛督政知其子茶々ノ弑スル所トナル初メ
政知後妻ノ子義通ヲ愛シテ茶々ヲ疎ニス茶々
之ヲ怨望シ遂ニ之ヲ弑ス義通走テ今川氏親ニ
依ル氏親即チ其將伊勢長氏ヲ遣ハシ茶々ヲ討
シテ之ヲ誅ス長氏ハ平維衡ノ遠孫ナリ長氏ノ
前數世足利氏ニ仕テ奏者タリ父ヲ貞藤ト云備
中守タリ勇ヲ任處ニ生ム是ヲ長氏トス足利義

視ニ仕テ近臣クリ應仁中義視ノ伊勢ニ走ル長
氏亦之ニ從テ義視京師ニ歸ルニ及ニテ長氏從
ク歸ラス留テ伊勢ニアリ是時ニ當リ將軍義政
政ニ怠リ將士離叛シ權臣山名細川各私黨ヲ立
テ戰爭止ム時ナレ長氏人ト為リ聰敏明決常ニ
大志ヲ抱ク嘗テ儒士ヲシテ三畧ヲ講セシム其
始メニ曰ク主將ノ法ハ務テ英雄ノ心ヲ攬ル
長氏之ヲ聽テ曰ク止ムヨ吾既ニ之ヲ得タリト
長氏慕政ノ衰ニ衆シ天下ヲ圖ラント欲ス因テ
陰ニ財ヲ散シテ豪傑ヲ結フ一日衆一謂テ曰ク

天下ノ事知ル可キノミ人苟モ功名ヲ成シ富貴
ヲ取ラント欲セハ今日ヲ舍テ、何ノ時ヲ待タ
シヤ夫レ武ヲ用フルノ地ハ關八州ニ如クハナ
レ吾諸君ト偕ニ東行シ臨機應變以テ事ニ從ハ
ント欲ス彼皆奮然之ニ從フ長氏乃チ荒木兵庫
等數人ト東行ス時ニ文明八年ナリ終ニ駿河ニ
至リ今川義忠ニ依ル義忠卒スルニ及ンテ子長
親猶幼ナリ長氏氏親ヲ輔ケテ功アリ將士長氏
ヲレテハ幡山城駿河ニ居レム後チ徒テ高國寺城
河駿ニ居ル陰ニ伊豆ヲ取ラントヲ圖リ未タ間ヲ

得スマテ政令ノ修メ賦稅ヲ輕クシ務テ恩ヲ遠
近ニ布ク遠近漸ク来リ從ヒ城下ニ聚落ヲ成ス
茶々政知ヲ弑スルニ及テ長氏衆ヲ集テ伊豆ヲ
取ラントヲ議ス衆奮テカヲ効サントヲ願フ乃
チ今川氏ノ兵ヲ併セテ伊豆ニ入り茶々ヲ誅ス
長氏遂ニ伊豆ニ留リ務テ恩威ヲ國內ニ布ク國
内ノ將士相率テ長氏ニ歸ス乃チ令ヲ出シ租稅
ヲ減シ諸雜課ヲ除ク民皆悅服ス因テ盡ク伊豆
ヲ領シ自カラ韭山城伊豆ニ居ル韭山ニ北條氏ア
リテ嗣絶ツ長氏ヲ養ヒ女ヲ以テ之ニ妻ハス長

氏以為ラク此條伊勢兩氏共ヒニ平姓ト遂ニ自
カラ北條氏ヲ林シ鬘ヲ削テ早雲ト号ス遂ニ相
横ヲ取ラン_一ヲ圖ル是時一當リテ上杉定正方
ニ上杉顯定ニ克チ兵威頗ル振フ定正意太驕ル
或ヒト定正ヲ諫テ曰ク扇谷ハ支庶ナリ缺ク山
内ニ枕スル所以ハ太田道灌アルヲ以テ今ヤ既
ニ道灌ヲ失フ兵力衰弱ニシテ偶然勁敵ニ克ツ
ハ僥倖ナリ今ニシテ戒メスハ禍將ニ至ラン
トスト定正攻ムルヲ能ハス早雲因テ好ヲ定正
ニ通シ助テ以テ顯定ヲ攻ム是ニ於テ兩上杉氏

皆漸ク衰_一
二十百五十二年_一明應ト改元ス
二十百五十三年_一時ニ高山政長管領タリ政長
宿將ヲ以テ自カテ威望ヲ有ヒ諸將ヲ輕侮_一富
山義禰ノ子義豊政長ノ專横ヲ訕テ遂ニ兵ヲ奉
ク三月政長義植ヲ奉シテ義豊ヲ討ス義豊_本啓_田
城_河ニ據ル政長之ヲ攻テ未タ下ス_一缺ハス時
ニ細川政元政長ト推テ事ヲ相忌ム義豊因テ好
ヲ政元ニ通シ俱ニ兵ヲ併セテ義植ヲ攻ム義植
兵敗テ脱走ス政長自殺ス政元既ニ戰勝テ京師

大日本外紀 卷之三十一
六

テ歸リ將軍ノ嗣ヲ立ンテ議ス初メ足利義通
ノ走テ今川氏ニ歸スルヤ今川氏之ヲ京師ニ送
ル義植之ヲ天龍寺ニ置キ將ニ僧ト為サントス
此ニ於テ政元議ヲ決シテ義通ヲ立テ嗣トス義
道後ヲ名ヲ義澄ト攻メ閏月政元義植ヲ捕ヘテ
之ヲ幽ス六月義植逃テ越中ニ走リ遂ニ周防ニ
赴キ大内氏ニ頼ル大内義興義植ヲ助テ兵ヲ起
サンテ計ル政元ノ養子高國事ヲ以テ政元ヲ
怨ミ叛シテ亦大内氏ニ通ス此ニ於テ細川ノ族
分レテ兩黨トナリ京畿大ニ亂ル

二十百五十四年甲寅義澄征夷大將軍ニ任ス細川
政元管領タリ十月北條早雲上杉定正ヲ助テ上
杉頭定ヲ攻メ定正軍中ニ死スルニ會シ子朝良
走り歸テ河越ヲ保ツ早雲モ亦兵ヲ引テ菰山ニ
歸ル早雲相模ヲ取ラント欲スルコト又シ小田
原相模ノ城主大森藤頼猶弱トリ早雲其城ヲ取ラ
ント欲シテ箱根ノ嶮ヲ憚カリ未々發スル能ハ
ス

二十百五十五年乙丑九月早雲人ヲシテ藤頼ニ言
ハシメテ曰ク吾菰山ニ獵ス獸箱根山中ニ逃ル

願クハ我ニ假スニ箱根ヲ以テセヨ吾繼マ、ニ
狩リ取ラン藤頼之ヲ許ス早雲乃チ獵衣ヲ着ケ
百餘人ヲ帥テ箱根ノ踰エ先ッ牛數十ヲ故チ法
螺ヲ鳴ラシ之ニ隨フ高ヨリ馳セ下リ直チニ城
内ニ入ル藤頼狼狽為ル所ヲ知ラス出テ三浦ニ
走ル早雲遂ニ小田原ヲ取ル是ノ時ニ當リ海内
武人五ニ相爭奪シテ朝廷幕府アルヲ知ラス
二千百六十七年^{中庚}九月天皇崩ス太子即位ス是ヲ
後拍原天皇トス
二千百六十七年^辛大龜ト改元ス

二千百六十四年^甲永正ト改元ス九月上杉朝良
早雲ト兵ヲ併セテ上杉顯定ヲ攻メ後チ朝良顯
定ト和ヲ結ヒ早雲ヲ圖ル
二千百六十八年^辰三月大内義興前將軍義植ヲ
奉シテ山陰山陽西海三道ノ兵ヲ舉テ東上ス細
川高國亦兵ヲ舉テ之ニ應ヌ高國ハ細川政元ノ
族政春ノ子ニシテ政元ノ養子タリ政元死スル
ニ及ンテ嗣タルヲ得ス故ヲ以テ居常快々タリ
此ニ至テ遂ニ兵ヲ舉テ義植ニ從フ將軍義澄大
ニ懼レテ義國ニ書ヲ興ヘテ和ヲ求ム義國肯ニ

ヒス義澄近江ニ走ル義植義興京師ニ入ル六月
詔レテ義澄ノ官爵ヲ削テ復義植ニ興テ義植義
興ヲ以テ管領トス
二百七十年^{庚午}六月上杉頭定長尾氏ト信濃ニ
戰フテ敗死ス是ニ於テ北條早雲勢益振フ
二百七十一年^{辛未}八月義澄近江ニ於テ卒ス
二百七十八年^{戊寅}七月北條早雲盡ク相模ヲ取
ル是ヨリ先ヤ早雲師ニ小田原ヲ取り威益張ル
近隣ノ豪傑未屬スル者太々妻ニ獨リ三浦義嗣
從ハ、新井城^和ニ據ル早雲之ノ攻ムル連歲遂

ニ之ヲ陷イレ義同ヲ殺ス此ニ於テ相模一州尽
ク早雲ニ從フ八月大内義興京師ニ在テ費用支
ハ難キヲ以テ西ニ帰ル細川高國管領タリ
二百七十九年^{己卯}八月北條早雲卒ス子氏細嗣
ク
二百八十年^{庚辰}三月細川高國
將軍義植ヲ逐フ義植淡路ニ走ル高國義澄ノ子
義晴ヲ迎テ之ヲ立ツ詔レテ義植ノ職ニ奪テ之
ヲ義晴ニ與フ
二百八十二年^{癸未}四月義植薨ス

二千百八十四年甲北條氏綱父ノ遺業ヲ繼テ相
模ヲ平定シ遂ニ進テ武藏ヲ取ランコトヲ計ル正
月江戸城ヲ攻テ之ヲ抜キ上杉朝興ヲ走ラシム
朝興退テ河越ヲ保ツ

二千百八十六年丙四月天皇崩ス太子即位ス是
ヲ後奈良天皇トス

二千百八十七年丁二月三好元長細川晴元ヲ奉
シテ京師ニ入ル細川高國之ヲ桂川山城ニ防キ共
ニ戰フテ敗走ス

二千百八十八年戊享祿ト改元ス正月晴元高國

ト和ヲ議ス既ニレテ和議復敗ル高國播磨ニ走
リ援兵ヲ浦上氏ニ請フ將軍義晴ヒ亦近江ニ走
リ佐々木氏ニ依ル

二千百九十一年辛卯六月高國浦上氏ノ兵ヲ得テ

晴元ヲ振津ニ攻ム是ヨリ先キ晴元詭ヲ信シ三

好元長ヲ疎ス元長怨望阿波ニ歸ル此ニ至リテ

晴元意頗ル悔ユ乃チ復元長ヲ召シテ自ケヲ接

ク元長乃チ晴元ヲ奉レ高國ト天王寺ニ撰津戰ヒ

大ニ之ヲ破リ高國ヲ獲テ之ヲ殺ス

二千百九十二年壬辰天文ト改元ス晴元意猶ホ元

長=快カラス遂ニ之ヲ殺ス元長如スルニ臨ン
テ妻フレテ子長慶ヲ携テ阿波ニ遣レシム
二千百九十三年^{癸巳}細川晴元京師ニ入り將軍義
晴ヲ近江ヨリ迎フ晴元自カラ管領タリ
二千百九十七年^{丁酉}是ヨリ光^光北條氏綱屢河越
ヲ攻テ赤タ下ス一能ハス足利高基ハ成氏ノ孫
ナリ氏綱ノカラ假テ上杉氏ニ報セント欲レ子
晴氏ノ為メニ氏綱ノ女ヲ娶ル此ニ於テ氏綱上
杉氏ノ罪ヲ鳴ラレ関東ノ將士ニ告諭レ益兵ヲ
出レテ河越ヲ攻ハ時ニ朝興既ニ卒レテ子朝定

嗣テ立ツ是歲七月氏綱大ニ朝定ヲ破リテ終ニ
河越城ヲ取ル朝定走テ松山^{武藏}ノ城主難波田^田氏
ニ依ル氏綱又撃テ大ニ之ヲ破ル此ニ於テ氏綱
ノ威望遠近ニ振ヒ武藏下總ノ諸城相率テ服從
ス獨リ足利義明下總ノ御弓^弓ニ在テ氏綱ト強ヲ
争フ義明ハ高基ノ弟ナリ
二千百九十八年^{戊戌}氏綱兵ヲ出レテ御弓ヲ攻ム
里見義弘房総ノ兵ヲ帥ヒ表テ義明ヲ援テ十月
氏綱鴻ノ臺^臺ニ戰フテ大ニ之ヲ破ル義弘敗走
シ義明捕獲セラレ此歲武田晴信其父信虎ヲ逐

日本書紀卷之三

テ甲斐ニ自立ス晴信ハ新羅三郎義光ノ遠孫ナ
リ父信虎少子信繁ヲ愛シテ晴信ヲ廢セント欲
ス晴信常ニ愚人ノ態ヲ裝フテ以テ自カラ晦マ
ス故ヲ以テ人皆晴信ヲ侮ル而シテ晴信自カラ
駿河ノ國主今川義元ト相結フ信虎ノ海^{ウミ}ノ^ノ城^{シロ}
信ヲ攻ムルヤ晴信奇策ヲ設テ城將平賀源心ヲ
斬ル信虎益晴信ヲ愚ム晴信因テ益義元ト相親
シム義元常ニ信虎ヲ除キ晴信ヲ立テント欲ス
而シテ信虎之ヲ知ラス此ニ至テ信虎晴信ヲ逐
ハント欲シ自カラ駿河ニ至リ義元ニ謀ル義元

困テ信虎ヲ拘留ス此ニ於テ晴信甲斐ニ自立ス
二十二年^{庚子}九月尼子晴久兵ヲ發シテ毛利元
就ヲ吉田城^{安藝}ニ攻ム大内義隆其將ヲ遣ハルテ
元就ヲ接フ晴久敗走ス晴久ハ塩谷高貞ノ後裔
ニシテ世出雲ニ居ル山名氏衰ノルニ及ンテ遂
ニ隣境ヲ并セテ頗ル強大ヲ致セリ元就ハ大江
廣元ノ遠孫ニシテ世安藝ニ居リ吉田城ニ據ル
初メ元就晴久ニ屬シ後チ背テ大内義隆ニ附ク
晴久怒ル故ニ之ニ及ヘリ
二十二年^{辛丑}北條氏綱卒ス子氏康嗣ク此時

二當リ上杉朝定等漸ク衰へ上杉憲政東北ニ雄
 張ス憲政強ク恃リ游宴ニ耽リ武事ヲ問ハス常
 二北條氏ヲ侮リ以テ意トセス故ヲ以テ將士多
 ク窮カニ情ヲ氏康ニ通ス或ヒト憲政ニ告テ曰
 ク北條氏能ク士心ヲ得ル備ヘスンハアル可カ
 ラスト憲政因テ朝定ト和ヲ結ビ國內ニ令ヲ布
 キ奢華ヲ停メ武備ヲ講ス既ニシテ或ヒト甘言
 ヲ以テ憲政ニ啗ハシメテ曰ク北條氏ハ鄙族人
 ノカニ依リ以テ國土ヲ攘ム者恐ルニ足ラニ
 ト此一於テ憲政宴樂故ノ如シ

二千二百三年癸卯正月大内義隆兵ヲ出シテ尾子
 晴久ヲ富田城出雲ヲ攻ム毛利元就亦兵ヲ帥テ之
 二從フ克クスレテ還ル是歲葡萄酒ノ人種カ尙
 大ニ來ル言語通セス秋ヲ以テ地ニ肅キ互市ヲ
 求ムルノ意ヲ示ス時ニ葡人烏銃ヲ賣ル來ル是
 ヲリ吾邦始テ烏銃アリ云
 二千二百四年甲辰是ヨリ先キ武田晴信ノ臣板垣
 信形參河ノ人山本勘助ヲ晴信ニ薦ム晴信名ヲ
 晴行ト賜フ晴信晴行ノ謀計ニ依テ信濃ノ敷城
 ヲ取ル比ニ至テ武田氏ノ威北方ニ振フ

二十四百六年^丙是ヨリ先キ上杉憲政既ニ上杉
朝定ト和ヲ結フ此ニ至テ俱ニ兵ヲ出シテ此條
氏康ヲ攻ム足利晴氏亦兵ヲ出シテ兩上杉ヲ援
ケテ河越ヲ圍ム守將比條綱成勇名アリ固ク守
テ下ラス氏康自カラ兵ヲ帥テ之ヲ援フ故サラ
ニ弱ヲ示シテ彙退キ走ル上杉氏等驕慢氏康ニ
備ヘス氏康乃チ夜ニ乘シテ直ニ上杉氏ノ陣ヲ
襲フヒ杉ノ軍大ニ驚テ擾乱ス氏康遂ニ朝定ヲ
捕ヘ憲政晴氏ヲ走ラス此ニ於テ八州ノ豪傑響
ノ如ク應ニ即夜比條氏ニ降ル者數ヲ知ラス氏

康ノ威開東ニ震ヒ上杉氏益々衰フ時ニ細川晴元
京師ニアリ游佐長教等兵ヲ操津河内ニ起シ京
師ニ向フ晴元兵ヲ發シテ之ヲ撃ツ克タス乃チ
三好長慶ヲ召ス長慶晴元ノ其父ヲ殺スヲ怨ミ
輒チ命ニ應ヒス其弟之ヲ諫ム乃チ兵ヲ帥テ晴
元ニ從ヒ游佐等ヲ撃ツ既ニレテ長慶三好宗三
ノ讒スル所ト為ル因テ復游佐等ト連和セント
欲スルノ志アリ
二十二年^丁七月初ニ足利義晴細川晴元ヲ
忌ミ管領職ヲ奪ハント欲ス晴元之ヲ覺リ將ニ

先ツ發レテ義晴ヲ攻メントス義晴出走リ將軍
職ヲ子義輝ニ讓レ此ニ至ラ義晴義輝比白河山城
ヲ保ツ四月晴元六角定頼ト謀ヲ通レ北白河ヲ
攻ム義晴義輝坂本江道ニ走ル既ニレテ和ヲ講ス
晴元管領クル故ノ如シ是歲武田晴信兵ヲ出レ
テ村上義清ヲ信濃ニ攻メテ之ヲ敗ル義清越後
ニ走リ長尾景虎ニ依ル景虎ハ平良文ノ遠孫ナ
リ良文ノ後數十世ヲ為景ト云フ為景四子アリ
季子ヲ景虎トス為景景虎ヲ愛セス以テ僧ト為
ント欲ノ景虎肯テ僧ノ事ヲ學ハス為景ノ死ス

ルニ及ハテ諸將多ク意ヲ景虎ニ屬ス為景ノ長
子晴景晴劣ナリ大臣等之ヲ利トシテ晴景ヲ立
テ景虎ヲ殺サンコトヲ謀ル景虎逃走ル宇佐美定
行等之ニ從フ遂ニ兵ヲ起シテ櫛尾城越後ニ據ル
晴景未リ攻ム景虎防戰大ニ之ヲ破リ晴景自殺
ス諸將士皆景虎ヲ推シテ主トス景虎曰ク吾勞
己ムヲ得スシテ兄ト兵ヲ抗スルニ至ル豈兄ノ
死ヲ料ンヤ而シテ今吾國ニ主タラハ人吾ヲ何
ト謂ハン今別ニ主ヲ擇フヘシ吾ハ僧衣ヲ被テ
以テ吾志ヲ明カサント遂ニ髮ヲ削テ謙信ト号

日本書紀 卷之三

ス諸將士強ヒテ勸メテ主ト為ント欲ス謙信乃
チ諸將ト誓テ曰ク君ヲ置クハ將ニ其令ヲ仰ン
トス今ヨリ吾令スル所敢テ違背スル無ンハ吾
諸君ノ請ニ從ハント明日權ヲ專ニスル大臣十
六人ヲ殺ス諸將皆股栗ス此ニ至テ義清等謙信
ニ謁レテ曰ク僕等武田信玄ノ若ムル所トナル
公ノ威名ヲ慕ヒ未テ救援ヲ請フト謙信許諾ス
十月兵ヲ帥テ信濃ニ入り河中嶋信濃ニ陣ス信玄
歩騎二万ヲ帥テ謙信ト水ヲ夾テ陣ス相持レテ
未タ戰ハス謙信戰ヲ挑ム信玄迎ヘ戰フ卯ヨリ

未ニ至ル勝敗未タ決セス謙信兵ヲ分チ上流コ
渡テ信玄ノ軍後ヲ襲フ信玄ノ軍顧ミテ退キ走
ル將士死スル者太タ多シ謙信ノ兵亦死傷頗ル
多シ乃チ引歸ル是ヲ河中嶋第一回ノ戰トス
二千二百九年酉三月三好長慶終ニ游佐長教ト
連和シ細川氏綱ニ應シ三好宗三ヲ攻ム宗三敗
走シテ榎並城新ヲ保ツ細川晴元兵ヲ出シテ宗
三ヲ援フ長慶攻テ又之ヲ破ル宗三走リテ江口
江ニ死ス晴元ハ坂下伊ニ走ル
二千二百十年戌二月晴元如意岳山ニ城キ義晴

義輝ヲ挾シテ長慶ノ未襲ニ備フ既ニシテ義晴
薨ス十一月長慶京師ニ入ル進シテ大津ニ至ル
義輝朽木江近ニ徒ル晴元志賀江近ニ陣シ長慶ヲ迎
ヘ撃テ敗走ス

二十二年十一月辛未是ヨリ先キ北條氏康扇谷ノ
上杉氏ヲ滅ス是歲氏康又上杉憲政ヲ平井城野上
ニ攻メ之ヲ陷イル憲政越後ニ走リ長尾景虎ニ
依リ其姓氏官號ヲ以テ尽夕景虎ニ授ク此ヨリ
景虎上杉氏ヲ冒シ關東ノ管領ト称ス是ニ於テ
兩上杉氏皆滅フ

二十二年十二月子正月將軍義輝三好長慶ト和

シ京師ニ還ル細川晴元ノ管領ヲ罷ム

二十二年十二月丑七月義輝三好氏ノ專恣ヲ苦

シ後晴元ヲ召置ス長慶怒テ義輝ヲ攻メント

ス義輝晴元復近江ニ走ル尋テ和ヲ講レテ京師

ニ帰ル長慶入テ謁レ晴元ヲ苅川城津ニ囚フ歲

ヲ踰テ卒ス

二十二年十二月寅八月上杉謙信復兵ヲ帥テ信

濃ニ入り犀川ニ陣ス武田信玄迎ヘ戰フテ敗走

ス是時ニ當リ東國尽ク北條氏康ニ帰ス而レテ

獨り足利晴氏古河城野ニ據リ氏康ニ從ハス十月氏康攻テ之ヲ陷イレ晴氏ヲ執ヘテ關宿下ニ置キ其子義氏ヲ立テ鎌倉葛西谷ニ居ラシム
二十二年五月弘治ト改元ス十一月毛利元就陶晴賢ト嚴島安ニ戰フテ大ニ之ヲ破リ晴賢ヲ誅ス初メ元就三子アリ伯ヲ隆元仲ヲ元春叔ヲ隆景ト云元春吉川氏ノ後ヲ嗣キ隆景小早川氏ノ後ヲ受ク是ニ於テ吉川小早川並ヒニ毛利氏ノ羽翼タリ毛利氏ノ兵鋒益銳ニ是時ニ當リテ大内義隆歌詠ニ耽リ武事ヲ怠ル陶晴賢頗ル

土心ヲ得テ義隆ノ罷臣ヲ殺サンコトヲ謀ル謀成ラス晴賢退テ其臣若山周ニ歸リ日夜反逆ヲ謀ル遂ニ兵ヲ舉テ山口周ヲ攻ム義隆拒クコト能ハス走テ筑紫ニ赴ク風ニ阻テラレ還テ大宰寺門ニ入ル賊兵来リ圍ム義隆自殺ス晴賢豊後ノ國主大友義鎮ノ弟義長ヲ迎テ奉レテ以テ主トス義隆ノ死スルヤ書ヲ遣レテ元就ニ託スルニ陶氏ヲ滅スヲ以テス乃チ議レテ朝廷ニ請フ曰ク大内義隆常ニ心ヲ王室ニ存ス圖ラスモ賊臣晴賢ノ弒スル所トナレリ臣元就微力ヲ奮



と討伐ヲ図ル伏シテ願クハ賊ヲ討スルノ詔ヲ
得シコトヲ朝議之ヲ許ス元就書ヲ遠近ニ移ス
應スル者頗ル多シ元就諸子ト謀リテ曰ク彼ノ
兵三万我兵五千寡寡懸絶其ニ平地ニ戦フ可カ
ラス宜シク嚴嵩ニ城ヤ誘ヤ致シテ之ヲ蹙迫ス
可シト是歳六月城成ル己斐新里ニ氏ニ命シテ
之ヲ守ラシム九月晴賢兵三萬戰艦千餘艘ヲ以
テ岩國^防ニ至リ戦ヲ議ス元就書ヲ贈リ罪惡ヲ
責ム晴賢乃チ意ヲ決シテ直ニ嚴嵩ヲ攻ム陣ヲ
塔^安間^安ニ布キ舟艦海ヲ擁ス城兵堅ク守ル元就

一將ヲ留メ吉田ヲ守ラシメ自カラ精兵三千ヲ
帥テ草津^安ニ至リ晴賢ト海ヲ隔テ、時ス一夜
大風雨元就溺クニ船ヲ發シ浪ヲ破テ渡ル直ニ
賊陣ノ背ニ出ツ賊風雨ヲ恃ンテ備ヲ設ケス元
就俄カニ鼓螺ヲ鳴ラシ急ニ之ヲ攻ム賊ノ諸氏
大ニ驚キ暗中ニ相撃ツ賊兵終ニ大ニ敗ル舟ヲ
争フテ遁ル晴賢自殺ス元就嚴嵩ニ留ルコト十
一日ニシテ兵ヲ引テ凱旋ス元就ノ威関西ヲ震
フ周防ノ人相驚テ曰ク毛利氏ノ軍至ルト陶長
房^安接ヲ大友氏ニ求ム大友氏敢テ應マヌ十二月

元就周防ニ入り攻テ長房ヲ殺ス周防ノ將士多ク歎テ元就ニ送ル元就遂ニ山口ヲ取り兵ヲ分テ長府下関門ニ赴カシメ以テ大友氏ノ援路ヲ絶ツ周防長門ノ士民山口ニ雲集ス元就兵ヲ引テ安藝ニ帰ル是ニ於テ元就尽ク大内氏ノ地ヲ併ヒテ遂ニ尼子氏ヲ圖ル
二十二年六月十六日辰此時武田信玄既ニ盡ク信濃ヲ定ム三月信玄謙信ト復河中嶋ニ對陣ス信玄山本晴行等ト謀テ曰ク我兵ヲ分テ北軍ノ後ニ出テ水軍ヲ以テ夾テ之ヲ擊タント乃チ保科彈

正等ヲシテ兵六千ヲ以テ戸神山濃ヲ越テ北軍ノ後ヲ襲ハレム時二月黒ク道ニ迷ヒホ夕達スル韃ハス謙信甲斐ノ軍夜ル人馬声アルヲ怪シミ潜カニ令ヲ傳テ八千騎ヲ將ヒテ直チニ信玄ノ營ヲ襲フ天大ニ霧ノルニ會ス謙信霧中ヨリ斬ル保科等ノ軍北軍ノ營ニ達スレハ營中隻騎ナフシテ河中嶋ノ戦声雷ノ如キヲ聞キ還テ筑摩河濃ヲ渡テ北軍ノ後ニ出ツ甲斐ノ軍之ヲ見テ返シ戦フ夾テ北軍ヲ擊ツ北軍敗レ走ル甲斐

ノ軍疲カント復追撃セマ是ヲ河中嶋第二回ノ
戰トス八月謙信復河中嶋ニ出ツ謙信自カラ兵
ヲ分テ河ヲ渡リ水ヲ背テ陣ス信玄持重敢テ出
テ戰ハス北軍營ヲ掃テ將ニ去ラントス諸將皆
追撃セント欲ス信玄曰ク謙信豈夜ニ迫テ退キ
去ル者ナランヤト天明ルニ及ンテ北軍陣ヲ嚴
ニシテ侍ツ諸將始メテ信玄ニ服ス信玄伏兵ヲ
山間ニ設ケテ戰ヲ挑ム謙信出テス信玄兵疲ル
、ヲ慮カリ夜ニ衆シテ退テ上野原信濃ニ入ル謙
信追撃ス信玄返戰フ交兵ヲ收メテ帰ル是ヲ河

中嶋第三回ノ戰トス甲越連年兵結テ解ス今川
義元為メニ周旋シテ和ヲ結ハシム
二千二百十七年丁巳九月天皇崩ス正親町天皇即
位ス
二千二百十八年戊午永祿ト改元ス
二千二百十九年己未初メ上杉憲政ノ越後ニ走ル
ヤ謙信ニ依リ以テ北條氏ニ報セント欲ス謙信
乃チ人ヲシテ北條氏ヲ窺ハシメ遂ニ兵ヲ將テ
上野ノ數城ヲ取ル此歲五月京師ニ入り關ニ詣
ル天皇賜フニ酒及ヒ劍ヲ以テス又將軍義輝ニ

調ス義輝賜フニ偏名ヲ以テシ名ヲ輝虎ト改ム
二千二百二十年^{庚申}正月謙信兵十一万ヲ帥テ小
田原ヲ攻ム氏康議シテ曰ク謙信威ヲ以テ諸將
ヲ馭ス諸將必ス服セラル者アラン我姑ラクカ
ラ批セスシテ坐カラ其寔ヲ待タハ彼將オニ自
カラ退カントスト敢テ出テ戦ハス諸將士果シ
テ謙信ノ無禮ヲ憤リ或ハ去リ或ハ叛ク謙信遂
ニ兵ヲ收テ走リテ越後ニ帰ル関東復氏康ニ服
從ス五月今川義元大衆シテ尾張ニ入ル織田信
長迎ヘ撃テ桶峽^{尾張}ニ戦ヒ大ニ之ヲ破リ義元ヲ

斬ル初メ義元既ニ駿河遠江參河ヲ定メ遂ニ尾
張ヲ取ラント欲ス此ニ至テ自カラ兵四万五千
ヲ將ヒテ来リ攻ム鷲津丸根^{并尾張}ノ守將急ヲ信
長ニ告ク信長赴援ハントス夜ル寔ヲ設ク酒醉
ニシテ信長起テ舞ヒ古謠ヲ歌テ曰ク人間五十
年^下天下ノ内ヲ較レハ夢幻ノ如クナリ一度生ヲ
受ケ滅セヌ者ノ有ヘキカト舞ヒ畢リテ天朋々
即チ單騎鞭ヲ揚ケテ發ス能ク從フ者十餘人熱
田^{尾張}祠^{尾張}ニ至ル此ホレニ千入ヲ得タリ行テ城ノ
兵ヲ發シ兵凡ソ三千東望スレハ鷲津丸根ニ城

火起ル將士逡巡ス信長益馬ニ鞭テ進ム時ニ義
元桶峽ニ陣シ戰勝テ備ヲ設ケマ信長乃チ鼓旗
ヲ伏セ疾ク馳セテ桶峽ニ至リ高キヨリ義元ノ
營ヲ窺ヒ乃チ馬上槍ヲ揮フテ馳セ下ル雷雨昏
冥ナルニ會ス直チニ營ヲ斫テ入ル義元ノ軍大
ニ驚キ狼狽出ル所ヲ知ラス毛利秀高進ンテ義
元ヲ斬ル義元ノ軍遂ニ大ニ敗ル信長清洲張尾
凱旋ス信長ノ名天下ニ振フ信長ハ平重盛ノ後
裔ナリ父ヲ信秀ト云フ信秀ノ前數世尾張清洲
城ニ居ル信秀ハ庶子ヲ以テ勝幡城張尾ニ居ル信

秀屬美濃ノ齋藤秀龍ト戰フ後ト和ヲ講ス秀龍
女ヲ以テ信長ニ妻ハス信長如ニシテ豪蕩武事
ヲ喜ム信秀既ニ死シ信長益武事ヲ講シ遂ニ清
洲ヲ取ル秀龍ノ子義龍父秀龍ヲ弑スルニ及ン
テ信長兵ヲ發シテ秀龍ヲ殺フ遂ニ諸城ヲ攻略
ス今川氏ヲ破ルニ及ンテ終ニ尽ク尾張ヲ併ス
二千二百二十一年辛酉是ヨリ先キ武田上杉和議
獲敗ル八月謙信復信濃ニ入り西條山ニ營ス信
玄二万騎ヲ帥テ来リテ兩宮渡信濃ニ陣ス謙信出
テ戰ハス信玄兵ヲ河中嶋一伏セテ軍ヲ分チ直

ナニ西條山ヲ攻ム謙信ノ斥候既ニ之ヲ知ル謙
信乃チ信玄ノ意外ニ出テント疑兵ヲ山上ニ置
キ自カラ全軍ヲ帥テ人ハ枚ヲ啣ミ馬ハ舌ヲ捲
キ兩宮渡ヲ涉テ直ヲニ進ミ甲斐ノ軍ヲ壓シテ
陣シ兵ヲ分テ銃摩川信ノ畔リニ陣セシム時ニ
甲斐ノ別軍既ニ西條山ニ向フ信玄報ヲ俟テ未
タ至ラス黎明越軍ノ旗幟前ニ在ルヲ見テ將士
皆愕然トシテ驚ク越軍鼓ヲ鳴シテ進ム信玄陣
ヲ攻ムルニ暇アラス弓銃手ヲ以テ拒キ戰ヲ謙
信進シテ信玄ノ麾下ニ過ル信玄走テ犀川ニ赴

ク越軍尾撃シテ之ヲ破ル甲斐ノ別軍返シ戰フ
テ越軍ヲ退ク謙信犀川ヲ背ニシテ陣ス使ヲ遣
ハシテ再々ヒ戰ハント欲ス信玄肯テ出テス
二千二百二十二年壬戌此時ニ當リテ足利氏大ニ
衰ヘ七道ノ將士各其國ニ據リ爭奪巳ム時ナシ
獨リ織田信長慨然トシテ天下ヲ平定スルノ志
アリ是歲十月天皇立入宗繼少子ヲ以テ使トシ勅旨
ヲ信長ニ賜フ詔スルニ天下ノ乱ヲ定ムルヲ以
テス信長沐浴衣ヲ更タメ勅旨ヲ拜シ宗繼ニ謂
テ曰吾聞ク天子ハ天下ノ君ナリ宜シク吾ヨリ

臣職ヲ共ス可レ今反テ使命ヲ辱ナラス吾何以
テ之ニ堪ヘン當サニ天威ヲ藉テ以テ凶徒ヲ平
ラケ以テ報復ヲ圖ル可レト勅旨ヲ以テ部下ノ
將士ニ告ク是ニ於テ日夜西上ノ車ヲ議ス時ニ
信長ノ部下柴田勝家丹羽長秀木下秀吉等謀將
勇士輩出ス秀吉ハ尾張愛智郡中邑ノ民彌助ナ
ル者ノ子ナリ母日輪懷ニ入ルト夢ム既ニシテ
姓ノルコトアリテ秀吉ヲ生ム如字ヲ日吉ト云
父彌助死スルニ及ンテ母ト共ニ邑人ニ寄食ス
邑人之ヲ厭ヒ母ヲ同里ノ筑阿弥ナル者ニ納ル

筑阿弥日吉ヲシテ僧トナラシム日吉大實撥飲
ニシテ僧事ヲ學フヲ飲セス慨然トシテ曰ク僧
ハ乞丐ノ徒ナリ大丈夫乱世ニ生レ安ソ乞丐ヲ
學フコトヲ為ンヤト游嬉意ニ任セ僧ヲシテ已
レテ厭ハシメント欲ス僧逃ニ父ニ謝シ日吉ヲ
シテ寺ヲ出テシム父復遣ハシテ人ノ奴ト為ス
至ル所口僅カ數月ニシテ去ル二十歳ナル比ホ
トニ遠ニ遠江ニ至リ松下之細ノ奴トナル之細
名ヲ興助ト命ス一日興助ヲシテ尾張ニ至ラシ
メ胴圓ノ鎧ヲ買ハシム因テ黄金六圓ヲ付シテ

之ヲ遣ル與助遂ニ其金ヲ攘ンテ刀劍衣服ヲ整
ヘ自カラ姓名ヲ作リテ木下藤吉ト云以為ラタ
今天下ノ豪傑織田信長ニ非ラスンハ共ニ功名
ヲ成スニ足ル者ナレト乃チ信長ニ仕ヘント欲
シ信長ノ出ルヲ伺ヒ道側ニ跪キ拜シテ曰ク臣
カ父筑阿弥嘗テ先君ノ奴タリ願クハ君復臣ヲ
以テ家奴ニ充テヨ信長熟視シテ笑テ曰ク汝カ
面ハ猿ニ似タリ心必ス捷ナラント收メテ以テ
奴トス是ヨリ常ニ鞋ヲ提テ以テ從ヒ勤仕太
シシ信長寢之ヲ親近ス後ヲ遂ニ進メテ吏トス

屢謀計ヲ信長ニ獻ス毎ニ其意ニ適ス
二千二百二十三年癸巳是ヨリ此キ北條氏康國ヲ
子氏政ニ授ケテ老ス自カラ武田信玄ト兵ヲ合
セ攻メテ松山城ヲ取ル松山ハ太田資正ノ屬城
ナリ資正使ヲ遣ハシテ里見義弘ニ説ク是歲正
月義弘兵ヲ下総ニ出シ資正ト合シテ江戸城ヲ
襲ハント欲ス城將之ヲ知り急ニ守備ヲ修メ使
ヲ馳ヒテ氏康ニ報ス氏康氏政兵ヲ將ヒテ小田
原ヲ發ス義弘ト鴻ノ臺ヲ夾ンテ陣ス進ンテ臺
傍ニ戰フ北條氏ノ兵敗走ス義弘意太々驕ル以

為ラク氏康復進ミ戰フ哉ハスト甲ヲ殺キ兵ヲ
休ス氏康之ヲ知り軍ヲ分テニツトシ日暮大霧
咫尺辨セサルニ會ジニ軍臺ノ南北ニリ鼓譟シ
テ登ル聲天地ヲ動カス義弘ノ軍大ニ驚テ潰走
ス義弘資正僅カニ身ヲ以テ免カル八月松永久
秀其君三好義長ヲ弑ス義長ハ長慶ノ子ナリ時
ニ長慶老病政ヲ久秀ニ委ヌ久秀義長ノ才望ヲ
忌ミ遂ニ之ヲ毒殺ス十河一存ノ子義繼ヲ以テ
長慶ノ嫡嗣トス一存ハ長慶ノ第十リ是歳足利
氏使ツレテ勅旨ヲ傳ヘ武田上杉北條三家ノシ

テ和ヲ講シ兵ヲ息メシノ
二十二年二十四年甲子初齊藤義龍既ニ父秀龍
ヲ弑シ子龍興ニ傳フ龍興庸劣將士多ク心ヲ信
長ニ歸ス信長因テ美濃ヲ略取シ九條洲股ノ二
城ヲ築キ木下秀吉等ヲシテ之ヲ守ラシム時
龍興井口城美濃ニアリ其將船葉通朝氏家經國等
屢龍興ノ失政ヲ諫ム龍興聽カズ是歳八月通朝
經國等龍興ニ畔ムキ遂ニ欸ヲ信長ニ送ル信長
乃チ三河ヲ攻ムルト声言シ兵ヲ聚メ帥テ西行
シ以テ井口ヲ襲フ火ヲ放テ疾ク攻ム城兵惶駭

出ル所ヲ知ラス遂ニ出降ル乃チ龍興ヲ逐フ信
長既ニ尾張美濃ヲ定メテ徙テ井口ニ居ル井口
ヲ更タメ名テ岐阜ト云
二千二百二十五年丑武田信玄子義信勇敢善ク
戦ヒ將士多ク心ヲ帰スルヲ以テ之ヲ忌ミ其已
レニ倣ハンコトヲ恐レ庶子勝頼ヲ愛ス勝頼因
テ義信叛ヲ謀ルト誣告ス信玄即チ義信ヲ囚ヘ
其親信ヲ誅シ遂ニ義信ヲシテ自殺セシム五月
三好義継半將軍義輝ヲ攻メテ之ヲ弑ス是ヨリ
先キ長慶既ニ死ス叔父政康康長及ヒ岩成七通

三好ノ三黨ト称ス松永久秀之ト謀リ長慶ノ喪
ヲ秘シ又義輝ヲ廢レテ義榮ヲ立ンコトヲ謀ル
時一義輝二條ノ第ヲ修ス徙リ居ル造營未タ全
ク成ラス三黨相謂テ曰ク機會失フ可カラスト
三黨及ヒ久秀等義継ヲ奉シテ千餘人ヲ率ヒ清
水寺^{山城}ニ詣ルト宣言シテ以テ其備ヲ弛ヘシメ
四面ヨリ喊声ヲ揚テ攻メ入ル一府中大ニ擾乱
ス宿直ノ諸將急遽拒キ戦フ利アラマ義輝曰ク
足利氏ノ運此ニ至テ窺マルト絶命ノ辞ヲ書シ
自カラ出テ防キ戦フ賊敢テ通ラス池田基門麻

陰ヨリ躍リ出テ義輝ノ足ヲ斬リ之ヲ斃ス是
於テ三黨義繼ヲ擁シテ高屋城河内ニ據リ以テ
義榮ヲ迎ヘ之ヲ立ツ尋テ征夷大將軍ニ任ス義
輝ノ弟覺慶一乘院ノ主タリ義輝ノ弑セラル
ヤ遁レテ近江ニ走ル名ヲ義昭ト改ム
二十二年二十六六年丙寅是ヨリ先キ毛利元就尼子
氏ヲ圖ルコト久シ嘗テ兵ヲ帥テ出雲ニ入り興
ニ戰フテホタ志ヲ得ル能ハス既ニシテ尼子晴
久病死シ子義久嗣ク元就益進ミ戰フ既ニシテ
子隆元卒スルニ會ス元就軍氣ヲ沮喪センコトヲ

恐レ令レテ曰ク亡児ヲ吊ヒント欲スル者ハカ
戰セヨト自カラ將トレテ白鹿城出雲ヲ攻メ之ヲ
降シ進テ富田城出雲ニ逼ル十余ノ寨ヲ起レテ圍
ミ攻ム城兵或降り或遁ル是歲七月義久終ニ保
ツ能ハサルヲ慮ハカリ遂ニ城ヲ致レテ出テ降
ル元就乃チ一將ヲ留メテ富田ヲ守ラレノテ凱
旋ス元就既ニ大内尼子兩氏ノ地ヲ併セテ悉ク
山陰山陽十二州ヲ定メ元春隆景ヲシテ地ヲ西
南ニ畧ヒレム是ノ時ニ當リテ南海ニ長曾我部
河野氏アリ西海ニ大友嶋津龍造寺氏アリ

二千二百二十七年^{丁卯}是ヨリ先キ三好ノ三黨義
輝ヲ弒シ義榮ヲ立ツルヲ以テ功ヲ專ハラニレ
テ常ニ得意ノ色アリ義継之ヲ惡ミ逃レテ久秀
ニ歸ス久秀多門城^{大和}ニ據リ康長ヲ攻メテ之ヲ
走ラス是ニ至ソテ義昭ノ近江ニアルヲ聞キ六
角義弼ヲシテ義昭ヲ圍ラシム是歲北條氏康武
田晴信ト兵ヲ合セテ上杉謙信ヲ攻メ火ヲ城下
ニ放テ歸ル謙信敢テ出テス謙信屢武藏ヲ窺フ
未タ志ヲ得ル能ハス遂ニ氏康ト和ス
二千二百二十八年^{戊辰}義昭近江ヲ逃テ若狹ニ走

リ武田義統ニ依ル又夫テ越前ニ趣キ朝倉義景
ニ依ル既ニレテ義景ノ以テ大事ヲ託スルニ足
ラサルヲ知り四方ヲ顧ミルニ織田信長ニ如ク
ハナシ七月潜カニ使ヲ信長ニ遣ハレ意ヲ諭ス
信長喜ビ乃チ義昭ヲ越前ヨリ迎ヘ岐阜ニ入ラ
シム義昭託スルニ興復ノ事ヲ以テス信長答テ
曰ク事固ニ難カラス幕下ノ為メニ京師ヲ定メ
ンコト必ス西月ヲ出テスト八月兵ヲ帥テ義昭
ト共ニ西上シ近江ニ入ル六角義弼ヲ攻メテ之
ヲ破リ直チニ進ンテ京師ニ向フ三好ノ三黨等

大ニ驚キ京師ヲ棄テ、遁去リ山城横津河内ノ諸城ニ據ル信長遂ニ京師ニ入ル天皇使ヲ下レテ信長ヲ慰勞ス信長柴田勝家等ヲ遣ハレ諸城ヲ攻ム岩成左通降ル三好政康康長等敗走ル三好義継松永久秀嚮キニ三黨ト相惡ミ先ツ欸ヲ信長ニ送ル是ヨリ先キ將軍義榮既ニ薨ス十月詔レテ義昭ヲ征夷大將軍ニ任ス信長ヲ從五位下ニ叙ル既ニレテ信長岐阜ニ帰ル信長既ニ義昭ヲ擁レテ畧近畿ヲ定メ頌ニ強大ヲ致レ願ヒテ武田上杉三氏ノ其後ヲ窺ハシコトヲ恐レ意

ヲ願ケテ武田氏ニ結ヒ互ニ婚姻ヲ成シ李子勝長ヲ送テ質トス是ニ於テ信玄織田氏ノ和ヲ講シ遂ニ今川氏ト絶シ今川義元ノ死スルヤ子氏真嗣ク氏真闇弱國人多ク服從ヤス信玄因テ以テ駿河ヲ取ランコトヲ謀リ十二月兵ヲ引テ駿河ニ入り八幡坂ニ軍ス氏真拒キ戰フテ敗走シ撰川江ニ遁ル信玄留テ駿河ニアリ久駐興津共ニ駿河ノ二城ヲ築キ以テ北條氏ノ未救ニ備フ二十二年二十九年己正月三好ノ三黨等信長ノ在ラサルヲ伺ヒ万餘人ヲ以テ京師ニ入り義昭

ヲ本國寺ニ圍ム棋津河内ノ諸將入り援フ賊兵
敗走ス時ニ信長岐阜ニアリ報ヲ得テ直ニ赴
キ投フ至ル片ハ既ニ平シ是月北條氏康兵ヲ駿
河ニ出シ今川氏ヲ救フ信玄與津ニ陣シ相持シ
テ未タ戰ハス信玄終ニ支フ可カラサルヲ度リ
夜ル軍ヲ拔テ退ク氏真乃チ相模ニ走ル氏康氏
政兵ヲ分テ諸城ヲ守ラシム五月信長ニ條城ヲ
築キ義昭ヲシテ此ニ居ラシム時ニ京師屢兵亂
ヲ經テ官闕大ニ壞ル信長命シテ之ヲ修治ス木
下秀吉ヲ留メテ京師ヲ護ラシム是時ニ當テ西

國ノ豪傑高橋宗像秋月ノ諸族大友氏ニ畔キ各
相雄張ス大友義鎮屢之ヲ攻メ戰爭己ム時ナシ
既ニシテ高橋等諸族皆毛利氏ニ屬ス元就乃チ
元春隆景ヲシテ兵五万ヲ帥テ高橋等ヲ援ハシ
ム進テ立花城筑ヲ攻メ之ヲ拔ク時ニ義鎮龍造
寺隆信ヲ佐賀ニ攻ム毛利氏ノ兵立花ニ迫ルヲ
聞テ兵ヲ引テ還リ乃チ其將戸次鑑連言弘鑑理
等ヲレテ兵ヲ帥テ赴キ援ハシム鑑連等隆景ト
大ニ多々良川筑ニ戰フ隆景利アラシテ退キ
立花城ヲ保シ鑑連等進ンテ立花ヲ圍ム相持シ

テ赤夕戰ハス時ニ大内輝弘寄寓レテ大友氏ニ
アリ義鎮因テ輝弘ニ兵五千ヲ給シ海路周防ニ
入リ毛利氏ノ虚ヲ襲ハシム既ニレテ尼子氏ノ
遺臣山中幸盛等毛利氏ノ西方ニ車アルヲ伺ヒ
故ノ尼子誠久ノ子ヲ索メ立テ、主トシ名ヲ勝
久ト改メ擁レテ出雲ニ入リ數城ヲ取ル時ニ元
就出テ、長門ニアリ之ヲ聞テ大ニ愕キ元春隆
景ヲレテ師ヲ班サシムニ將夜ニ乘レ城ヲ出テ
走ル大友ノ兵敢テ追ハス十月二將遂ニ引キ返
レ元就既ニ師ヲ班ヘシ輝弘ヲ逐フテ之ヲ殺ス

二千二百三十年庚元龜ト改元ス正月元春隆景
兵萬餘ヲ帥テ元就ノ孫輝元ヲ輔ケテ勝久ヲ攻
ム山中幸盛拒戰フテ敗走ス元春等進ク戰フテ
末次城出ヲ陷ル既ニレテ元就疾アリ輝元隆景
帰ル元春留テ勝久ヲ攻ム四月織田信長越前ニ
入リ朝倉義景ヲ攻メ手筒金崎二城ヲ取ル淺井
長政近江ニ起リ義景ニ應ス信長兵ヲ返ス六月
信長横山城近江ヲ攻ム城將急ノ長政ニ報ス長政
援ヲ義景ニ乞フ義景族景健ヲシテ赴キ援ハシ
ム兵二万ヲ使セテ大寄山近江ニ陣ス信長夜ル大

寄山ノ炬火ヲ望ンテ曰ク是曉キニ乘シテ我ヲ
 襲ハントスルナリト乃令ヲ下シ兵ヲ分テ十
 三隊トレ坂井政尚池田信輝等ヲシテ先鋒トシ
 以テ長政ニ當ル徳川家康其兵ヲ帥テ自カラ朝
 倉氏ニ當ル兵ヲ引テ西ニ向フ天明姉川江ニ至
 リ北軍ト遇フ信輝等戰ヒ利アラヌ信長兵ヲ分
 テ長政ノ横ヲ撃ツ長政敗走ス家康景健ヲ迎撃
 ツ前鋒利アラヌシテ走ル家康怒テ麾下ヲ以テ
 左右翼ヲ縱チ夾ミ撃テ大ニ之ヲ破ル景健敗走
 ス横山以下ノ諸城皆解ケ走ル家康ハ新田義重

ノ遠孫ナリ義重ノ父義國ハ源義家ノ子ナリ上
 野ニ居リ新田足利ノ諸邑ヲ食ム義重因テ新田
 ヲ以テ氏トス義重ノ第四子ヲ義季ト云徳川邑
 上ヲ領ス因テ以テ氏トス義季五世ノ孫ヲ滿義
 ト云時ニ宗子新田義貞後醍醐帝ノ詔ヲ奉シテ
 北條氏ヲ討ス滿義亦之ニ從フ北條氏既ニ滅ヒ
 足利尊氏反スルニ及ンテ官軍利ヲ失ヒ義貞戰
 没ス義貞ノ子義興義宗義フ上野信濃ニ攀ルニ
 及ンテ滿義ノ子政義政義ノ子親季亦從ヒ起ル
 軍敗ルニ及ンテ遂ニ之ニ死ス親季ノ子ヲ有

親ト云義宗ノ子貞方ト俱ニ匿テ信濃ニアリ関
東ノ管領足利氏滿之ヲ覺リ兵ヲ遣ハレテ之ヲ
擊ツ有親貞方ト遁レテ陸奥ニ入ル氏滿大兵ヲ
帥ヒテ来リ擊ツ有親二子ヲ携テ二野ニ入リ民
家ニ潜伏ス後僧尊觀ニ從テ容貌ヲ寔レ僧徒ノ
狀ヲ為シ西レテ参河ニ至ル少子ヲ德壽ト云松
平村^{河参}ノ長信重養テ子トス長スルニ及テ名ヲ
泰親ト命ス家ヲ松平村ニ築キ以テ父有親ヲ奉
ス泰親養父ノ職ヲ襲テ亦村長タリ後テ州ノ目
代トナル遂ニ進テ参河守ニ任ス次子信光嗣ク

岡崎^{河参}ニ居リ和泉守ト称ス信光男女四十餘人
ヲ生ム次子親忠嗣ク岩津^{河参}ニ居ル親忠九男ヲ
生ム長子親長ヲ以テ岩津ヲ守ラシメ弟三子長
親ヲ以テ嗣トシ安祥^{河参}ニ居ル長親ノ長子信忠
嗣ク信忠ノ長子ヲ清康ト云清康從テ岡崎ニ居
ル國人称シテ岡崎公ト云清康西参河ヲ定メ威
名日ニ顯ル美濃尾張ノ諸城主往々從ハレト欲
スル者アリ清康西シテ尾張ニ入ラント欲ス叔
父信定事ヲ以テ清康ヲ怨ム清康西上スルニ及
テ信定從ハス廬ニ築レテ亂ヲ為ント欲ス國元

日本書紀 卷之三

安陪定吉清康ニ從テ軍中ニアリ屬書ヲ信定ニ
 贈テ以テ之ヲ戒シト時ニ流言アリ定吉信定ト
 謀ヲ通スト定吉子弥七ニ謂テ曰ク吾冤罪ヲ蒙
 ル主公必ス之ヲ察セン若レ察セラレステ誅
 セラルトモ汝慎テ怨ヲ為ス勿レト軍中馬逸
 レ衆騷擾スルニ當テ弥七乃ヲ奉レテ清康ノ側
 ニアリ以為ラク父定吉既ニ殺サルト急遽刀ヲ
 拔テ清康ヲ弑ス植村榮安傍ヨリ弥七ヲ斬ル清
 康ノ子廣忠嗣ク信定遂ニ自立ヲ謀ル定吉廣忠
 ヲ奉レテ伊勢ニ走ル信定遂ニ上野ニ自立ス定

吉諸將ト謀リ拔ラ今川氏ニ乞フテ以テ廣忠ヲ
 納ル信定事ノ成ラザルヲ懼リ終ニ未リ調ス廣
 忠参河守ニ任ス信定已ニ卒シテ子清定上野ニ
 據テ叛ス廣忠攻テ之ヲ降ス松平忠倫叛シテ織
 田氏ニ降り輪田城河参ニ據ル廣忠刺客ヲ遣ハシ
 テ之ヲ殺ス織田信廣代リテ輪田ヲ守ル廣忠拔
 ラ今川氏ニ求ハ義元箕子ヲ殺ス廣忠乃チ子家
 康ヲ以テ質子トシ駿河ニ赴カレト時一家康生
 テ六歳途ニシテ織田氏ニ奪ハル既ニテ廣忠
 卒ス義元一將ヲ遣ハシテ田崎ヲ守ラレト時ニ

織田信秀既ニ没レテ子信長嗣ク遂ニ今川氏ト和
フ結フ此ニ於テ家康岡崎ニ歸ル居ルコト十餘
日ニレテ往テ今川氏ニ質タリ家康知ナルヲ以
テ義元推リニ玄河ノ國務ヲ領ス家康駿河ニ在
ルコト數年一日從容トレテ義元ニ謂テ曰ク僕
知ニシテ國ヲ離レ他邦ニ流寓スル既ニ年アリ
願クハ一タヒ歸テ先人ノ墳墓ヲ拜スルヲ得シ
ト義元之ヲ許ス是ニ於テ始テ岡崎ニ歸ル時ニ
弘治二年ナリ義元ノ織田氏ヲ攻ムルヤ家康義
元ノ為メニ大高城飛ヲ守ル既ニレテ義元敗死

ス家康岡崎ニ歸ル義元ノ子氏真昏懦ニレテ罷
臣政ヲ專ニシ家康ノ異心アルヲ讒ス氏真亦岡
崎ノ勢漸ク盛ナルヲ視テ心家康ヲ猜ム信長素
ヨリ天下ニ覇タラント欲スルノ志アリ兵ヲ京
畿ニ出サント欲シテ武田北條氏皆其後ヲ窺フ
ヲ以テ未タ敢ハス是ニ於テ信長使ヲ家康ニ遣
ハシ和ヲ求ム家康之ヲ許ス信長迎ヘ饗セント
欲ス家康尾張ニ赴キ信長ト盟フ武田信玄亦使
ヲ遣ハン好ヲ修レト請フテ曰ク請フカヲ併テ
氏真ヲ滅シ大井川町駿以東我之ヲ取ラレ以西君

日本書紀 卷之三

三七

之ヲ取レト家康之ヲ許ス此ニ至テ信長長政ヲ
攻メント欲シ使ヲ遣ハシテ援ヲ乞フ因テ兵ヲ
出シ信長ヲ援フ是時信長既ニ近畿十餘州ヲ定
メ家康ハ参河遠江ヲ定ム十月北條氏康卒ス子
氏政嗣ク和フ信玄ニ求ム信玄氏政ノ今川氏真
ヲ庇フヲ以テ之ヲ拒ク因テ氏真ヲ殺シテ以テ
意ヲ表セシム氏真大ニ懼テ走テ家康ニ帰ス氏
真家康ニ勸メテ謙信ト好ミヲ結ハシム謙信之
ヲ許シ夾テ信玄ヲ攻メシコトヲ約ス此ニ於テ
信玄意ヲ決シテ家康ト絶ツ十二月信長義景長

政ト和ス是ヨリ先ヤ信長三好ノ三黨ヲ討ム義
景長政其隙ニ乘シ京師ニ入ラントス信長之ヲ
聞テ曰ク奴輩ラシテ鞏下ヲ蹂躪セシムルハ我
ノ恥ナリト乃チ還テ京師ニ入ル時ニ義景長政
ノ兵敷山ニ陣ス信長之ヲ攻ム僧徒ヲ諭シテ已
レヲ助ケシメントス僧徒聽カス既ニシテ木下
秀吉丹羽長秀等兵ヲ師テ未リ會ス信長ノ軍益
張ル長政等懼レテ和ヲ請フ信長聽カス長政等
乃チ將軍義昭ニ請フ義昭乃チ信長ノ營ニ至リ
和ヲ講セント請フ信長乃チ之ヲ許ス各兵ヲ解

日本書紀 卷之三

テ還ル

二千二百三十一年^ホ六月毛利元就卒ス元春計
 ヲ得テ哭泣シ將士ニ謂テ曰ク葬莫ノ事隆景在
 リ吾ハ當ニ敵ヲ亡ボシ以テ靈魂ヲ慰ム可シト
 急ニ攻テ未石城ヲ陷ル山中幸盛出降ル既ニシ
 ニ復逃去ル元春進シテ新山^伯ヲ攻ム尼子勝久
 出走ル遂ニ幸盛ト俱ニ信長ニ歸ス九月一向宗
 ノ賊徒長嶋^伊勢^伊起ル信長勢多ニ陣シ諸將ヲレ
 テ嚴山ヲ焚シム諸將皆驚ク佐久間信盛等諫テ
 曰ク昔ニ桓武帝此寺ヲ建テ今幾千年王城ノ鎮

夕リ今ニシテ之ヲ滅ス其レ之ヲ如何シ信長曰
 ク吾國賊ヲ除クノ初メ吾人ヲ遣ハシテ僧徒
 ヲ諭ス彼服セス益凶徒ヲ助ケテ王師ニ抗ス是
 國賊ナリ今ニシテ之ヲ除カスハ其患ヲ貽ス
 測ル可カラス圍テ之ヲ焚キ彼等ヲシテ遺類ナ
 カラシメヨト諸將服従ス明日攻テ之ヲ焚キ僧
 徒婦女老少トナク尽ク之ヲ斬ル是ヨリ先キ信
 長皇宮ヲ修ム是歳落成ス
 二千二百三十二年^ホ是ヨリ先キ家康等ヲ譏信
 通シ信玄ヲ夾ミ攻メンコトヲ約ス四月譏信

日本書紀 卷之三

兵ヲ信濃ニ出シ以テ邊カニ家康ヲ獲フ十二月
信玄進テ一形原江遠ニ陣レ以テ濱松城江遠ニ逼ル
家康出テ戰ハントス信長ソ將化久間信盛諫テ
曰ク信玄ハ老將ナリ輕シク戰フ勿レ家康曰ク
驚キニ信玄小田原ヲ攻メ兵城下一逼ルト雖凡
氏康敢テ出テス世傳テ之ヲ笑フ今敢我城下ヲ
踏ム敢テ一矢ヲ發セサルハ大夫ニ非スト諸將
固ク諫ム家康乃チ止ム既ニレテ信玄伴ハリ退
ク家康遂ニ出テ三形原ニ陣ス戰ノテ甲斐ノ軍
ヲ却ク信玄乃チ奇兵ヲ以テ横井マニ家康ノ軍

ヲ擊ツ家康ノ軍擾乱ス信玄乃チ全軍ヲ驅テ徐
ク進ム敵声山岳ニ震フ家康遂ニ大ニ敗レ濱松
ニ歸ル家康命シテ城門ヲ閉ク甲斐ノ軍北ルヲ
追テ城ニ逼ル城門閉サルヲ見テ伏ヲ恐レ敢テ
入ラズ明日信玄退テ刑部江遠ニ陣ス
二千三百三十三年癸天正ト攻元ス是ヨリ先キ
義昭信長ト隙アリ信長屢書ヲ以テ義昭ヲ諫ム
義昭憤懣遂ニ信長ヲ除カント謀ル二月義昭潛
カニ使ヲ發レテ信玄及ヒ謙信ニ諭シテ信長ヲ
夾ミ攻メシトヲ約ス因テ石山堅田江遠ニ城

キ兵食ヲ微殺ス信長之ヲ聞テ曰ク吾終ニ兵ヲ
用ヒサルヲ得スト諸將ヲ遣ハシテ勢多ヲ渡リ
石山堅田ヲ攻メシム自カヲ出テ大津ニ至ル既
ニシテ石山降り堅田陥ル乃チ進テ京師ニ入り
和ヲ義昭ニ乞フ義昭聽カスニ條城ヲ圍ム義昭
窮迫遂ニ和ヲ請フ信長乃チ帰ル四月武田信玄
卒マ子勝頼嗣ク是ヨリ先キ信玄野田城河ヲ攻
メ疾作テ帰ル是ニ至テ卒ス謙信之ヲ聞テ歎レ
テ曰ク世復此英雄男子アルヤ七月義昭再々ヒ
兵ヲ舉ケ諸將ヲ留テニ條城ヲ守ラシメ自々ラ

出テ嶺嶺鳴山ニ據リ宇治河ヲ沮テ固イトス報知
岐阜ニ至ル信長即チ起テ直チニ馳セテ澤山江
ニ至リ夜ニ乘シテ朝妻渡江ヲ濟リ直チニ京師
ニ入ル義昭ノ兵勢多ヲ距ク者顧ミテ潰走ス信
長急ニ攻テニ條城ヲ陥ル城兵皆降ル乃チ其兵
ヲ以テ先鋒トシ嶺鳴ニ向フ攻テ義昭ヲ破ル義
昭降ヲ請フ信長仍又間信盛木下秀吉ヲシテ之
ヲ覆置セシム二人義昭ヲ若江河ニ徙ス此ニ於
テ織田氏遂ニ足利氏ニ代リテ令ヲ京師ニ出タ
ス村井貞勝ヲ以テ所司代トシ秀吉等ヲシテ畿

日本書紀 卷之三

内ノ諸城ヲ抜カシメ自カラ岐阜ニ歸ル八月信
長彼兵ヲ發シテ淺井長政ヲ伐テ月瀨城江ヲ攻
テ之ヲ抜キ進テ山田江ニ陣ス朝倉義景兵二万
ヲ率ヒテ長政ヲ援フ時ニ長政ノ將燒尾江ヲ守
ル者信長ニ降り信長ノ軍大ニ振フ所在響ノ如
ク應ス義景懼テ遁レ去ル信長追撃シテ大ニ之
ヲ破リ進テ敦賀前ニ至ル義景自殺ス信長軍ヲ
返シテ長政ヲ小谷城江ニ攻メ遂ニ長政ヲ獲タ
リ九月餘江江ヲ攻ム六角義弼降ル十一月三好
義繼ヲ攻ム義繼自殺ス是ニ於テ淺井朝倉六角

三好氏皆滅ヒ道畿悉ク平ラシ
二十二年三十五年^乙是ヨリ先キ徳川家康長篠
城^河ヲ修メ以テ奥平信昌ニ賜ヒ益守禦ヲ修テ
武田氏ニ備ヘシム五月武田勝頼兵ヲ参河ニ出
タシ長篠ヲ攻ム信昌急ヲ家康ニ報ス家康援ヲ
信長ニ請フ信長之ヲ許ス家康騎卒二万ヲ帥ヒ
信長兵五万ヲ合セテ来リ援フ撃テ大ニ勝頼ノ
軍ヲ破リ其將山縣昌景馬場信房等ヲ獲ル斬首
一万餘武田氏ノ宿將精兵大抵此役ニ盡シ八月
朝倉氏ノ餘黨越前ニ起リ諸城ニ據ル信長自カ

日本書紀 卷之三

ヲ將トシテ討テ之ヲ平ラク
二十二年三月十六年丙子正月信長安土近江ニ城ツキ
以テ謙信ニ備フ自カラ徙リテ之ニ居ル子信忠
ヲシテ岐阜ニ居ラシメ以テ勝頼ニ備フ四月大
坂一向ノ僧徒復叛ス信長佗又聞信盛等ヲ遣ハ
シテ之ヲ討ス尋テ親カラ將トシテ撃テ大ニ之
ヲ破ル是歲足利義昭備後ニ至ル毛利輝元之ヲ
納ル信長是ヨリ毛利氏ト兵ヲ構フニ至ル
二十二年三月十七年丁丑八月松永久秀信長ニ叛シ
テ大坂ノ賊ニ應ス初メ久秀ノ信長ニ降ルヤ信

長之ヲ殺中ニ辱シソテ曰ク此人入ノ能シ難キ
所ヲ為スモノ三々ヒ公方ヲ弑スルナリ三好氏
ニ叛スルナリ大佛殿ヲ燒クナリト久秀汗ヲ流
シテ俯伏ス久秀是ヨリ意自カラ安セヌ久秀愛
スル所ノ茶鑑アリ信長之ヲ得ント欲ス久秀吝
テ獻セス是ニ至リテ遂ニ叛キ去リ志貴城和ニ
據ル信長子信忠ヲ遣ハシ細川藤孝明智光秀等
ヲシテ信忠ヲ輔ケテ之ヲ討セシハ城陷ル久秀
火ヲ放ナテ自殺ス十月信長近畿畧定マルヲ以
テ山陽山陰ヲ畧セント欲シ羽柴秀吉ニ命シテ

西征セシム是ヨリ先キ秀吉柴田勝家丹羽長重
ノ威名ヲ慕ヒ自カラ氏ヲ羽柴ト改ム十一月秀
吉播磨ニ入り依用上月ノ諸城ヲ取ル尼子勝久
ヲシテ上月ヲ守ラシム城淳田直家ニ属ス直家
接ヲ毛利氏ニ乞フ

二千二百三十八年^寅三月上杉謙信卒ス是ヨリ
先キ謙信書ヲ信長ニ贈テ曰ク公屢畿内ノ敵ト
戦フ未タ北人ノ枝柄ヲ見ス請フ明春三月十五
日ヲ以テ八州ノ卒ヲ率テ西上シ公ト相見シ公
謙信ヲ視ルコト都人士ノ如クスルコト勿レト

此ニ至リテ令ヲ八州ニ下シテ將ニ發セントス
信長大ニ懼ル既ニシテ謙信發スル前ニ日疾作
リ遂ニ卒ス織田氏ノ間諜越後ニ在ル者走り帰
リテ信長ニ報ス信長大ニ喜ヒ掌ヲ撫シテ曰ク
是ヨリ天下大ニ定ルト是ニ於テ信長依久間信
盛前田利家汝々成政ヲシテ兵ヲ帥ヒテ加賀能
登越中ニ入ラシム謙信既ニ死シ姪景勝嗣キ武
田勝頼ト和ス四月毛利輝元元春隆景ヲシテ兵
ヲ將ヒテ上月城ヲ圍ミ以テ淳田氏ヲ接フ信長
荒木村重ヲシテ秀吉ヲ接ハシム相持スル連月

東軍屢利ヲ失フ信長命シテ師ヲ班ス七月上月
遂ニ陷イル勝久自殺ス山中幸盛出降ル尋テ殺
サル既ニシテ直家潛カニ信長ニ通ス兵ヲ伏セ
テ元春隆景ヲ擒ニセント欲ス謀漏ル元春隆景
西ニ帰ル十月荒木村重信長ニ叛シテ伊丹津
據ル初メ村重ノ臣事アリテ大坂ニ赴ク人村重
ノ大坂ノ賊ト通スルヲ疑ヒ之ヲ信長ニ告ク信
長信セス明智光秀村重ノ声績ヒレノ上ニ出ル
ヲ嫉ミ百方之ヲ讒ス信長乃チ人ヲシテ村重ヲ
詰ラシム村重驚愕信長ニ面謁シテ之ヲ陳謝ヒ

ント欲ス光秀村重ヲ止メテ曰ク主公ノ怒リ祀
ス可ラス足下必ス社ク勿レト村重乃チ伊丹ニ
據テ叛シ毛利氏ニ應ス十一月信長自カラ將ト
シテ村重ヲ討ス秀吉往テ村重ニ説キ圖ヲ攻メ
シム村重聽カス十二月信長進テ伊丹ヲ圍ム克
タス信長兵ヲ損ヒシトヲ慮カリ長圍ノ策ヲ
為シ池田信輝蒲生氏郷等ヲ留メテ之ヲ守ラン
ノテ自カラ安土ニ遷ル時ニ別所長治亦叛シテ
三木城_藩ニ據リ毛利氏ニ通ス秀吉之ヲ圍ム未
克タス長治村重ト互ニ相應提_以是歲大友義鎮

鳴津義久ト耳川^{日向}ニ戰フテ敗績ス初メ義鎮九州探題タリ七國ヲ領取シテ威鎮西ニ振フ嚮キニ日向ノ伊東祐^{スガタカ}義久ノ攻ムル所トナリ走リテ大友氏ニ頼ル其兵ヲ假リテ以テ日向ヲ復セシト欲ス此ニ至リテ義鎮遂ニ兵ヲ發シテ祐立ヲ口向ニ納レントス一戰敗ぬ其精兵多ク尠ス大友氏ノ威遂ニ衰フ
二千二百三十九年^{卯巳}正月長治出テ秀吉ヲ襲フ秀吉迎ヘ撃テ大ニ之ヲ破ル長治退テ復三木城ニ入ル秀吉乃チ多ク寨ヲ築テ糧道ヲ絶ツ九月

信長復伊丹ニ赴ク村重夜ル伊丹ヲ逃レテ華隈津ヲ保チ援兵ヲ毛利氏ニ乞フ毛利氏辭スルニ海路梗塞ヲ以テス既ニシテ伊丹城中信長ニ通スル者アリ信長ノ兵乃チ入り保ツ十二月荒木氏ノ族三千餘人ヲ誅ス攝津ヲ以テ池田信輝ニ賜ヒ因テ華隈ヲ攻メシメ遂ニ之ヲ陥イル村重走リテ毛利氏ニ依ル
二千二百四十年^{辰庚}正月秀吉三木ヲ攻ムル益志ナリ長治自殺シテ以テ士卒ノ死ヲ宥メント請フ秀吉之ヲ許ス長治火ヲ放チテ自殺ス三木陥

大友氏ノ

四六

イリ播磨悉ク平ラク遂ニ祖馬因幡ノ諸城
 フ下タニ是歲詔シテ大坂僧徒ヲシテ信長ト和
 セシム僧徒乃チ城ヲ信長ニ致ス
 二千二百四十二年^{壬午}二月信長子信忠ト兵十二
 万ヲ帥ヒテ武田氏ヲ伐ツ信忠進ンテ信濃ノ諸
 城ヲ陷イル三月甲斐ニ入ル徳川氏及ヒ北條氏
 各兵數万ヲ帥ヒテ来リ會ス勝頼拒戦フ能ハス
 追レテ天目山^{甲斐}ニ據ム將士離叛シテ兵僅カニ
 四十人織田氏ノ將瀧川一益等四面ヨリ圍ミ攻
 ム遂ニ勝頼及ヒ其子信勝ヲ獲タリ武田氏滅フ

信長甲斐信濃駿河上野ヲ分割シテ有功ノ將士
 ニ與フ一益ヲ以テ関東ノ管領トシ因テ柴田勝
 家等ヲンテ一益ト相應授シテ以テ上杉氏ヲ圖
 ラシメ遂ニ安土ニ歸ル此時ニ當リ秀吉高松城
 中^備ヲ圍ム毛利輝元數万騎ヲ帥ヒテ来リ援フ秀
 吉使ヲ馳セテ援軍ヲ信長ニ請フ五月信長大ニ
 兵ヲ徵シ池田信輝明智光秀等ヲシテ先ツ發セ
 レメ信長子信忠ト總キ進ンテ京師ニ至リ水原
 寺ニ謁ス信忠別寺ニ謁ス六月光秀其君信長ヲ
 弑ス初メ信長將士ニ遇スル禮節ヲ設ケス屢事

ニ因テ光秀ヲ罵辱ス光秀自カラ意フ信長已レ
ヲ殺サント欲スト信長森蘭丸ヲ罷ス信長嘗テ
蘭丸ニ謂テ曰ク三歳ノ後志賀郡ヲ以テ汝ニ與
ヘント時ニ志賀郡ハ光秀ノ領ナリ光秀聞テ自
カラ疑フ我ノ誅セラルハ三歳ノ後チニアル
カト此ニ至リテ信長ノ命ヲ受テ徳川家康ヲ饗
セントシ周旋甚ク勸ム俄カニシテ西征ノ命ア
リ光秀大ニ悲リ饗具ヲ湖中ニ投シテ去ル此ニ
於テ始テ謀叛ノ心アリ光秀既ニ安土ヲ發シ遂
ニ丹波ニ入り變宕山祠ノ下ニ宿ス卒然傍人ニ

問ノ曰ク本能寺ノ溝深ク幾尺アルヤト衆聞テ
之ヲ異レム既ニシテ光秀從子光春及ヒ其將齋
藤利三等ニ謂テ曰ク汝等能ク我カ為メニ死セ
ンヤ然ラサレハ速カニ吾頭ヲ斬レ皆曰ク唯命
ニ是從ハン光秀曰ク右府吾ヲ殺サレトスル者
數タヒ吾將ニ先ツ發セントスト光春等諫メン
ト欲ス然氏光秀ノ意已ニ決スルヲ視テ乃チ
謀ヲ賛成ス是ニ於テ丹波ノ兵ヲ悉シテ發ス
言シテ曰ク命ヲ奉シテ西奔吉ヲ獲フ夜ル大江
山波ヲ經テ老坂波ニ至ル路令レラニトナル右

スレハ則備中道ナリ光秀乃今左ニ馳ス士卒
 皆異シム既ニ進ンテ桂川城ヲ渡リ光秀颯言シ
 テ曰ク敵ハ本館寺ニ在リト衆始メテ其叛スル
 ヲ知ル黎明本館寺ヲ襲フ信長驚起テ曰叛スル
 者誰ノ森蘭丸出テ其旗ヲ視ル報シテ曰光秀ナ
 リ信長大怒リヲヲ手ニシテ出ツ蘭丸以下拒戦
 フ信長射テ賊數人ヲ斃シテ弦絶ツ槍ヲ執テ戦
 フ右脇ヲ傷ツク乃チ火ヲ放テ自殺ス蘭丸以下
 百餘人皆力戦シテ死ス信忠寔ヲ聞キ馳セテ本
 館寺ニ赴ク途煙燄天ヲ蔽ヲ望見テ馳テニ條城

ニ赴ク俄カニシテ光秀来リ圍ハ信忠非キ戦フ
 テ利アラズ亦自殺ス從兵皆死シ一人モ遁ル、
 者ナシ信忠ノ子三法師岐阜ニアリ信忠前田玄
 以ニ遺命シテ之ヲ擁護セシム玄以乃チ岐阜ニ
 赴キ三法師ヲ奉シテ清洲ニ入ル信長崩從二位
 ニ叙レ官右大臣ニ傳ス常ニ四方ヲ平定スルヲ
 以テ志トス廷臣嘗テ征夷大將軍タランコトヲ
 勸ム信長曰ク吾何リ室町氏ノ故跡ヲ襲ハニヤ
 ト人ヲ知リ善任シ政偏私ナシ然レ性猜忍下ヲ
 馭マル嚴酷ニ過ク以テ禍ニ及フ惜ヒカナ徳川

家康將ニ大坂ヨリ京師ニ赴カントス途ニシテ
 變ヲ聞キ直チニ京ニ入り光秀ヲ討セントス本
 多忠勝衆寡敵セサルヲ以テ之ヲ止ム家康乃チ
 間道ヨリ伊勢ヲ經テ參河ニ歸ル光秀既ニ京師
 ヲ定メ安土ヲ取ラント欲ス安土城中變聞ヲ得
 テ上下大ニ擾レ諸將士多逃亡ス蒲生賢秀安土
 ヲ留守ス乃チ夫人ヲ奉レテ其邑日野ニ奔ル光
 秀遂ニ安土ヲ取り復京師ニ赴ク此時ニ當リテ
 羽柴亦吉高松城ヲ圍ミ毛利氏ト相持ス輝元秀
 吉ノ援兵將ニ至ラントスルヲ聞キ和議ヲ請フ

秀吉之ヲ許ス將ニ共ニ盟ヲ成サントス適本館
 寺ノ變報至ル秀吉大ニ驚キ未タ宣言セズ秀吉
 自カラ度ル事終ニ秘ス可カラス寧ロ我ヨリ之
 ヲ發セント乃チ輝元ノ使者ニ告ルニ變故ヲ以
 テシテ曰ク事已ニ此ニ至ル公等猶和セント欲
 スルヤ我ヲ擊ント欲セハ今日ニ若ハナシト使
 者復命ス輝元大ニ喜ヒ諸將ト會議ス諸將皆曰
 信長死シ軍氣沮廢ス此時ニ乘レテ之ヲ擊タハ
 秀吉ヲ獲ンコト必セリ隆景獨リ從ハスレテ曰
 ク信長ノ死スルハ蓋シ天秀吉ニ幸スルナリ應

仁以表七道分離ス天將ニ一ノ豪傑ヲ生レテ以
テ之ヲ掃蕩セントス吾秀吉ヲ視ルニ此人ニ非
サルヲ得ンヤ今其言ヲ聞クニ常人ノ及フ所ニ
非ラス其量誠ニ測ル可カラズ今和成ラントレ
テ彼ノ窺アルヲ幸トレ之ト戰フ彼直我曲彼必
ス敢死来リ戰ハン未タ勝ヲ必ス可カラズ吾ヲ
以テ之ヲ計ルニ和議ヲ成スニ若クハナレト輝
元之ニ従ス乃チ使ヲ遣ハシ表ヲ弔ニ且ツ好ヲ
修ム是ニ於テ秀吉還テ米秀ヲ討ス兵ヲ引テ途
ニ上リ尼崎津ニ至ル是時ニ當リ信雄信孝其他

織田氏ノ公族將師觀望敢テ先ツ討賊ノ師ヲ發
スル者ナレ秀吉兵ヲ引テ倫中ヨリ至ルト聞キ
皆大喜ヒ乃チ尼崎ニ會シ戰ヲ議ス高山友洋先
鋒タリ中川清秀之ニ次ク池田信輝丹羽長秀又
之ニ次ク信孝其後ハニアリ秀吉後拒タリ光秀
秀吉ノ至ルヲ聞キ大ニ駭キ自カラ洞嶺洞嶺河ニ至
リ遂ニ進ニテ淀城山ニ入ル翌黎明秀吉諸將ヲ
統ヘ至リ光秀ト山崎山ニ戰テ大ニ之ヲ破ル光
秀走リ勝龍城山ニ入ル秀吉ノ軍從テ之ヲ圍ム
數重城兵稍々散亡レテ餘ス所僅カニ百人光秀

夜ニ乘レテ十餘騎ト圍フ潰レテ北ニ走リ小栗
城ニ至ル土兵四七ニ起リ林中ヨリ槍ヲ以テ
光秀ヲ刺ス光秀馬ヨリ墜テ死ス光秀ノ從子光
春走リ湖ヲ渡テ自殺ス齋藤利三捕ヘラレ誅ニ
伏ス秀吉乃チ信長ノ屍ヲ收テ之ヲ葬リ捷ヲ朝
廷ニ奏ス光秀ノ首ヲ本能寺ニ梟ス信長ノ死ヲ
距ルコト十有三月秀吉威京畿ニ震フ朝廷其功
ヲ嘉レテ從四位ニ叙レ右近衛中將ニ任ス秀吉
辭レテ拜セス秀吉信長ノ繼嗣未々定サルヲ以
テ諸將ト清洲ニ會ス柴田勝家越中ヨリ龍川一

盜開東ヨリ前田利家能登ヨリ丹羽長秀若狹ヨ
リ皆兵ヲ收メテ清洲ニ至ル三法師信長ノ嫡孫
ナリ以テ立テ嗣トシ名ヲ秀信ト改メ安土ニ居
ラシム信雄尾張ヲ領シ信孝美濃ヲ領シ諸將織
田氏ノ地ヲ介領ス而シテ秀吉ハ既ニ自カラ播
磨但馬因幡丹波諸州ヲ畧定シ皆之ヲ有ス是以
テ其分地ヲ受ケテ十月詔シテ秀吉ヲ以テ從五
位下ニ叙レ右近衛少將ニ任ス秀吉國最富ミ兵
最強ミ自カラ持ス願ル矜貴ナリ信孝之ヲ惡ミ
以為ラケ我家不幸ニシテ遺故ニ遭ヒ我家ノ奴

輩長ヲ令テ切ヲ立テ以テ争テ遺地ヲ領取ス吾
レ信雄ト同年生但月日少シク後ル、ヲ以テ兄
弟ノ名アルノミ況ニヤ復仇ノ功吾與リテカア
リ秀吉盜ニテ以テ專ラ已レノ功トス篡竊ノ勢
既ニ成ル今之ヲ除カスハ他日復之ヲ制ス可
カラスト乃チ勝家一益ト秀吉ヲ除カシコトヲ
謀ル秀吉之ヲ聞テ乃チ信雄ニ結ヒ急ニ兵ヲ發
シテ信孝ヲ岐阜ニ攻ム岐阜兵寡シ信孝伴ハリ
テ和ヲ請フ秀吉乃チ帰ル勝家越前ニ在リ出テ
信孝ヲ援ハント欲ス雪ニ阻テラレ出ルコト能

ハス一益勝家ニ教ヘ伴ハリテ和シテ明年ヲ待
テ之ヲ夾ミ攻メントス勝家之ニ從ヒ前田利家
ヲシテ秀吉ニ至ラシメ憾ヲ解キ共ニ如主ヲ輔
ケンコトヲ請フ秀吉之ヲ許ス秀吉其計ヲ知り
以為ラク吾且ツ勝家ノ膽ヲ破ラント兵ヲ引テ
長濱江^近ヲ攻ム勝家ノ義子勝豊長濱ヲ守ル秀吉
ヲ迎ヘ降ル秀吉城壁ヲ修メ越前ノ要路ヲ絶ツ
二千二百四十三年^{癸未}正月秀吉兵七万ヲ部シテ
三道ヨリ伊勢ニ入り一益ヲ長鳴^甲ニ攻ム勝家
之ヲ聞キ兵ヲ發シ南出シ佐久間盛政ヲシテ

出ア柳瀬江ニ陣セシム秀吉諸將ヲ留メテ一益
 ニ備ヘ自カノ諸軍ヲ引テ柳瀬ニ赴ク連珠ノ砦
 ヲ築キ自カヲ長濱ニ屯ス三月勝家兵ヲ引テ柳
 瀬ニ至ル秀吉ノ兵敢テ出戦ハス四月信孝兵ヲ
 撃テ勝家一益ニ獲ス秀吉其軍ヲ以テ信孝ヲ攻
 ノ大垣ニ至ル盛政赴キ援ハントシ秀吉ノ諸砦
 相連續シテ道路通セサルヲ恐ル山路將監盛政
 ニ語テ曰ク敵ノ諸壘皆固シ獨リ中川清秀ノ壘
 賤岳^ニ進ノ麓ニアリ其備固ラス其不意ヲ撃ハ必
 ス勝ン盛政之ニ從ヒ夜ニ衆シテ賤岳ニ至ル清

秀高山友祥ト數千人ヲ以テ出戦ノ盛政之ヲ破
 ル清秀苦戦シテ死ス盛政已ニ勝テ意太夕驕ル
 勝家之ヲ召還ス盛政肯セズ是時ニ當リ秀吉將
 ニ岐阜ヲ圍マントス既ニシテ報至ル秀吉使者
 ニ問テ曰ク盛政退クヤ答テ曰ク未クシ秀吉踊
 躍シテ曰ク吾大勝ヲ得タリト即チ堀尾吉晴等
 ヲ留メ自カラ兵一万五千ヲ提ケテ疾馳セテ賤
 岳ニ赴ク盛政大ニ驚キ兵ヲ引テ岳北ニ陣ス秀
 吉進ンテ盛政ヲ撃ツ如藤清正福鳴正則如藤嘉
 明平野長泰堀安治精屋武則足利元先ヲ争

フテ奮戦遂 大ニ盛政ヲ破ル盛政敗走ス斬首
五千世ニ之ヲ賤岳ノ七槍ト示勝家敗報ヲ得テ
大ニ驚キ走テ北莊越前ニ入ル秀吉追テ北莊ニ至
リ盛政寺ヲ獲タリ城ヲ圍ム數重勝家宴ヲ設ケ
將士ト訣飲シ慷慨シテ曰ク吾先君ノ恩ニ報セ
ント欲シ終ニ猿面藤吉ノ困シムル所ト為ル豈
天ニ非スヤ遂ニ火ヲ放テ自殺ス秀吉遂ニ進ニ
テ加賀鉢登ノ諸城ヲ攻メテ悉ク之ヲ下ス是時
ニ當リ信雄岐阜ヲ攻ム城兵皆潰ニ信孝出走ル
信雄迫リテ自殺セシム一益秀吉ニ降ル秀吉之

ヲ近江ニ放ツ八月詔シテ秀吉ヲ從四位下ニ叙
シ參議ニ任ス七月大ニ戰功ヲ賞ス是ニ於テ近
畿粗定ル十一月秀吉大坂城ヲ築キ徙リテ之ニ
居ル是歲龍造寺隆信鳴津義久ト有馬肥前ニ戰フ
テ敗死ス時ニ龍造寺氏肥前ニアリ鳴津氏薩摩
ニアリ大友氏豊後ニアリ共ニ鎮西ニ雄張ス而
シテ大友龍造寺ニ氏漸ク衰弱シテ鳴津氏勢益
張ル
二十二年四十四年甲申信雄秀吉ノ威推益盛ナル
ヲ視テ心平ラカナル鉢ハス秀吉亦信雄ヲ除カ

山本親忠

ント欲ス信雄三驍將アリ秀吉故ラニ厚ク之ヲ
 遇ス信雄意益安セス三月遂ニ三將ヲ殺シ秀吉
 絶テ援ヲ徳川家康ニ求ム家康兵ヲ發シテ信
 雄ヲ助ク兵二万ヲ合セテ小牧張尾ニ軍ス秀吉十
 二万人ヲ以テ大山張尾ニ軍ス池田信輝森長可堀
 秀政瀧川一益等亦秀吉ニ應ス四月家康大ニ秀
 吉ノ兵ヲ長湫張尾ニ破リ池田信輝森長可ヲ獲タ
 リ六月秀吉大坂ニ帰り家康參河ニ帰ル十月秀
 吉人ヲレテ和ヲ信雄ニ請シム信雄之ヲ許ス家
 康使ヲ遣ハシ和成ルヲ賀ス信雄家康ニ勸メテ

亦秀吉ト和ヲ結ハシム家康乃チ予秀康ヲ大坂
 ニ送ル秀吉大ニ悦ビ羽柴氏ヲ赫セシム
 二十二年四月十五年酉乙二月秀吉正二位ニ叙シ内
 大臣ニ任ス五月秀吉羽柴秀長秀次ヲシテ舟師
 六萬ヲ帥ヒテ長曾我部元親ヲ土佐ニ伐ツ初メ
 元親四圍ヲ并吞シ遂ニ南海ニ雄タリ秀吉書ヲ
 以テ元親ニ論シ京師ニ朝セシム元親聽カス此
 ニ至リ遂ニ之ヲ伐ツ浮田秀家小早川隆景并ヒ
 ニ師ヲ率ヒテ之ニ會ス攻テ諸城ヲ陷イル元親
 乃チ降ヲ乞フ南海悉ク定マル元親ノ三州ヲ削

リ諸將ニ分與ル七月秀吉関白ニ拜ス姓豊臣ヲ
賜フ初メ秀吉微賤ヨリ起リ姓氏ナキヲ以テ自
カラ平氏ヲ称ス此ニ至リ征夷大將軍タラン
ノ欲ス武秀吉ニ謂テ曰ク故事大將軍ハ源氏ニ
非レハ不可ナリ公宜シク関白トナル可シ秀吉
喜フ遂ニ詔レテ関白ニ任ス八月秀吉兵十方ヲ
帥ヒテ越中ニ入り佐々成政ヲ攻メテ之ヲ降シ
進ンテ越後ニ入り上杉景勝ト盟フ
二千二百四十六年丙戌二月秀吉第ヲ内野山ニ築
ク名ケテ聚樂ト云四月秀吉其妹ヲ以テ家康ニ

事ハス初メ信濃ノ豪族真田昌幸歎フ秀吉ニ送
ル真田氏曾テ武田氏ニ属ス武田氏滅ヒテ徳川
氏ニ属ス後チ北條氏ヲ攻メテ沼田野ヲ取ル徳
川氏北條氏ト婚スルニ及ンテ家康昌幸ニ諭レ
テ沼田ヲ北條氏ニ還サシム昌幸聽カス家康怒
テ之ヲ攻ム上杉景勝秀吉ノ旨ヲ以テ兵ヲ發レ
テ昌幸ヲ援フ秀吉信雄ト謀テ曰ク吾既ニ中州
ヲ定ム東西未タ服セス今將ニ西伐セントス宜
レク家康ト和シ以テ北條氏ヲ距ク可シト信雄
乃チ使ヲ遣ハシ家康ニ諭ス使者三反スレトモ

家康聽カス遂ニ婚嫁ノ事ヲ陳ス此ニ至リテ家
 康乃チ之ヲ許ス北條氏直之ヲ聞キ意頗ル危懼
 凶五月上杉景勝入朝ス是ヨリ先キ大友義鎮亦
 入朝ス初メ島津義久九國ヲ荐食ス義鎮及龍造
 寺政家並ヒニ援ヲ秀吉ニ請フ岩屋筑前ノ城主高
 橋鎮種立花筑前ノ城主立花宗茂皆歿ヲ秀吉ニ送
 ル此ニ於テ秀吉將ニ西島津氏ヲ伐ントス七月
 義久筑前筑後ヲ畧レ乃チ岩屋ヲ攻ム城陥イリ
 鎮種自殺ス義久兵ヲ移レテ立花ヲ攻ム宗茂固
 守ル義久終ニ退キ去ル八月秀吉毛利輝元長曾

我部元親等ニ令レテ兵ヲ西海ニ出サシムス仙
 石秀久ヲ遣ハシ義久ヲ招諭ス義久聽カス秀久
 大友氏ノ兵ヲ以テ義久ヲ撃ツ戦ヒ利アラズ義
 久大舉豊後ニ入ル時ニ大友義鎮既ニ死ス子義
 統出戦フテ敗走凶十月家康京師ニ至リ秀吉ヲ
 見ル十一月天皇位ヲ皇太孫ニ禪ル皇太孫立ツ
 是ヲ後陽成天皇トス十二月秀吉ヲ以テ太政大
 臣ニ任ス關白故ノ如シ
 二千二百四十七年丁亥秀吉大舉西伐ス二月兵大
 坂ニ集ル者十五万人乃チ秀長ヲレテ前軍ヲ帥

ヒ先ツ發セシム三月秀吉自カラ大軍ノ帥ヒテ
京師ヲ發シ水陸俱ニ進ム秀長既ニ豊前ニ至ル
義久子家入ヲシテ耳川ヲ守ラシム秀長進ンテ
耳川ニ至ル家久退テ高城日向保ツ既ニシテ又
退ク秀吉海ヲ濟リ豊前ニ入ル四月秋月種實ヲ
攻テ之ヲ降ス龍造寺政家兵ヲ以テ来リ會ス進
ンテ肥後ニ入ル諸城解走ル遂ニ進ンテ薩州ニ
入ル鳴津氏ノ諸將義久ニ勸メテ降ヲ乞ハシム
義久乃チ伊集院忠棟ヲ遣ハシ秀長ニ因テ罪ヲ
謝シ降ヲ乞フ秀吉之ヲ許ス義久髮ヲ削リ僧衣

ヲ被テ出テ降ル秀吉遂見ル命シテ子義弘ヲ以
テ嗣トス六月秀吉軍ヲ還シ太宰府ニ至ル大ニ
功罪ヲ論シ鳴津氏ヲシテ薩摩大隅日向ヲ領セ
シメ其侵地ヲ削ル肥後ヲ佐々成政一筑前ヲ小
早川隆景ニ豊前ヲ黒田孝高森勝信ニ筑後ヲ毛
利秀包立花宗茂ニ賜フ其他皆四領ヲ復ス龍造
寺氏ノ族鍋嶋直茂國事ヲ扱ス政家卒スルニ及
ンテ乃チ直茂ヲ立ツ此ニ於テ西國悉ク平ラク
七月秀吉京師ニ復命ス是歲西海諸侯皆國ニ就
ク佑々成政肥後ニ至ル下ヲ治ムルコト能ハス

士民皆叛シ國內大ニ擾ル年ヲ踰ヘテ粗定マル
秀吉之ヲ讓テ遂ニ死ヲ賜フ肥後ヲ以テ如藤清
正小西行長ニ分賜シ是歲琉球入貢ス
二千二百四十八年子戊正月秀吉奏レテ臨幸ヲ請
フ四月天皇聚樂第ニ幸ス秀吉文武百官ヲ率ヒ
テ扈從ハ駕駐マル五日ニシテ宮ニ還ル五月秀
吉使ヲ遣ハレ北條氏直ヲ諭シテ入朝セシム氏
直答ハス是時氏政已ニ老レ子氏直嗣ク然ル事
皆氏政ニ決ス
二千二百四十九年巳七月復北條氏ヲ諭ス答ハ

ス時ニ東北ノ豪傑皆争テ使ヲ遣ハシ秀吉ニ從
フ獨リ伊達政宗陸奥出羽ニ據リ肯テ降ラス
二千二百五十年庚寅二月秀吉大舉北條氏ヲ伐ツ
兵凡ツ二十五萬徳川前田上杉諸將ヲシテ先發
セシム三月秀吉自カラ大軍ヲ帥ヒテ東ス氏政
兵ヲ分テ諸城ヲ守ル秀吉織田信雄蜂須賀家政
等ヲシテ並山ヲ攻メ秀次及ヒ堀秀政等ヲシテ
山中城ヲ攻メシム山中城遂ニ陥イル四月秀吉
長驅シテ小田原ニ至ル城中大ニ懼ル北條氏ノ
將諸城ヲ守ル者皆解走リ小田原ニ入ル諸將密

ニ款ヲ秀吉ニ送ル者アリ氏政氏直未々之ヲ知
ラス秀吉諸軍ニ令レテ城ヲ圍マレム前田上杉
等別ニ兵ヲ武藏上野ニ總安房ニ出レ諸城ヲ攻
メテ之ヲ陷イル而レテ小田原孤立固ク守リテ
下ラス秀吉故サラニ日夜置酒宴會持久ノ意ヲ
示ス城兵大ニ困レム伊達政宗箱根ニ至リ家康
ニ因テ降ヲ乞フ秀吉廷見テ其久シク未帰セサ
ルヲ責ム政宗唯々敢テ仰視ルコト能ハス秀吉
命レテ國ニ帰ラレム是時ニ當リ小田原城圍ヲ
受ル數月北條氏ノ將款ヲ送ル者頗ル多シ是ヨ

リ城中人々相疑フテ逃亡相踵ク七月氏直遂ニ
降ヲ乞フ秀吉之ヲ許シ氏政ヲシテ城ヲ致シテ
出テレム使ヲ遣ハシテ氏政ニ死ヲ賜フ氏直以
下ヲ高野ニ放ツ八月蒲生氏郷ニ賜フニ會津十
一郡ヲ以テレ以テ東北ヲ鎮撫セシム北條氏ノ
故地八州ヲ以テ家康ニ賜フ九月西歸京師ニ復
命ス是ニ於テ東國悉ク定マル
二千二百五十一年 卯十一月秀吉奏請フテ秀次
ヲ以テ関白ニ任シ自カラ太閤ト称ス是歲宗義
智ヲシテ朝鮮ニ至ラレマ明國ノ攻ムルノ意ヲ

日本書紀

卷之三

王李昫ニ諭レ導ヒテ明ニ入ラレム李昫從ハス
是ニ於テ秀吉諸將ニ謀リ西征ヲ決レ令ヲ諸道
ニ下レ大ニ兵食ヲ備ヘシム是ヨリ先キ信長秀
吉ヲ西征大將トレ中國ヲ伐シム信長曰ク功成
ラハ中國ヲ攀テ汝ニ授ケン秀吉拜レテ對テ曰
ク臣敢テカヲ竭サ、ランマ臣ノ微カヲ以テ幸
ニ中國ヲ定メハ君以テ功臣ノ未々賞ヲ受ケサ
ル者ニ與ヘヨ臣ハ則チ直チニ進ンテ九州ヲ定
メン願クハ其一歲ノ入ヲ賜ヘ糧仗ヲ蓄ヘ舟楫
ヲ造リ海ヲ濟リテ朝鮮ニ入ラン君願クハ臣ニ

賜フニ朝鮮ヲ以テセヨ臣朝鮮ノ兵ヲ用ヒテ人
明ニハリ庶幾クハ君ノ威靈ニ依リテ明國ヲ席
卷シ三國ヲ合ヒテ一ト為シ是臣ノ宿志ナリト
後常ニ其志ヲ成サント欲ス是ニ至リ明主政ノ
失ヒ武備廢弛マルヲ聞キ益之ヲ窺ハント欲ス
朝鮮我命ニ從ハサルニ及シテ意益決シ遂ニ諸
將帥ヲ會シ其意ヲ語ル諸將皆驚ヒテ敢テ答フ
ル者ナレ浮田秀家進ンテ曰殿下此大事ヲ採ル
誰カ努力ヒサラン議乃チ決ス諸將ヲ遣ハン國
ニ就キ各兵食ヲ備ヘシム秀吉ノ母大廳秀吉ノ

海外ニ赴クヲ聞テ大ニ之ヲ憂ヘ寢食ヲ廢スル
 ニ至ル乃チ議シテ秀家ヲシテ代リ往カシメ自
 カラ出テ肥前名古耶ニ陣セントス
 二十二年文祿ト攻元天二月秀吉京
 師ヲ發ス四月名古耶ニ至ル諸軍會スル者五十
 萬人分テ八軍トシ韓ノ八道ニ向テ浮田秀家元
 帥タリ加藤清正小西行長各一軍ヲ率ヒテ迭ト
 ニ先鋒タリ別ニ水軍ヲ置ク水陸七軍總テ十五
 万人大礮ヲ發シテ帆ヲ揚ク勝本下臺ニ至リ風ニ
 阻テラル、二十日行長宗義智ト素下ヨリ海路ヲ

諸下ス潜カニ其軍ヲ技キ風濤ヲ破リテ進ム清
 正之ヲ知リ怒テ發ス風益甚クシテ進ム能ハス
 行長終ニ釜山ニ達シ攻テ守將鄒撥ヲ斬ル進シ
 テ諸城ヲ技キ遂ニ東萊ヲ陷イル清正行長ニ後
 ル、三日ニシテ釜山ニ至ル行長已ニ進ムヲ聞
 キ切齒シテ曰ク悔ユラクハ豎子ニ先ニヒラル
 ト乃チ別路ヲ取り慶州ヲ攻メ之ヲ技キ轉戦シ
 テ進ム向テ所皆靡ク秀家諸軍ヲ帥ヒ相繼テ陸
 ニ上ル五月清正行長道ヲ分テ國都ヲ攻ム朝鮮
 王世子ト平壤ニ走リ使ヲ馳ヒテ急ヲ明ニ告ク

日本書紀

我軍國都ヲ取ル十餘日ニテ諸軍悉ク國都ニ
集マル忝家自カラ國都ニ居リ諸將ヲシテ進取
ヲ圖ラシム清正ハ咸鏡道ヨリ行長ハ平安道ヨ
リシ其他ノ諸將道ヲ分テ進ム朝鮮王金命元等
ヲ留メ平壤ヲ守ラシメ自カラ咸鏡ニ走ラント
ス清正ノ在ルヲ聞キ轉シテ義州ニ走ル行長進
シテ大同江ニ至リ金命元ト江ヲ夾ンテ相持ス
命元精兵ヲ遣ハシ夜行長ヲ襲フ行長擊テ之ヲ
却ケ走ルヲ追ヒ江ヲ濟リテ進ム命元等城ヲ棄
テ走ル行長遂ニ平壤ヲ取ル忝家令シテ諸將

ヲシテ國都平壤間ノ諸城ヲ守ラシム人友義統
鳳山ヲ守リ黒田長政白川ヲ守リ小早川降景開
城ヲ守リ以テ德援ニ備フ我水軍諸將既ニ金山
ヲ發シ進ンテ全羅ニ出ツ全羅水軍將李舜臣軍
艦數千艘ヲ以テ巨濟洋ニテリ水軍將如藤嘉明
寺舜臣ト洋中ニ戰フテ敗ラル舜臣因テ閑山嶋
ニ屯シテ以テ我水軍ヲ拒ク是以テ水軍進ンテ
陸軍ニ合スル能ハス七月明主其將祖承訓大儒
ヲ遣ハシテ精兵五千ヲ率ヒテ朝鮮ヲ援フ承訓
等進ンテ朝鮮ニ入り人ニ問フテ曰ク平壤ノ和

兵已ニ退クヤ百ヤ曰ク未レ承訓酒ヲ奉ケ祝シ
テ曰ク天我ヲシテ大功ヲ成サシムルナリト進
ンテ平壤ニ逼ル行家之ヲ城外ニ拒キ撃テ大ニ
之ヲ破リ史儒ヲ斬ル承訓身ヲ焚ンテ走ル明國
敗報ヲ得テ舉朝震動ス清正既ニ咸鏡道ニ入り
朝鮮ニ王子咸鏡北道一遁ルヲ聞キ自カラ輕
兵ヲ率ヒテロニ行クコト數百里ニ王子會寧府
ニアルヲ聞キ驅テ之ニ赴ク行クコト五十日ニ
シテ始テ達ス府使鞠景仁ニ王子ヲ拘ヘ降ヲ乞
フ是ニ於テ清正ニ王子及ヒ大臣等ヲ拘ヘ之ヲ

鏡城ニ護送セシハ景仁ニ問フテ曰ク此ヨリ北
方何ノ國ノ景仁曰ク元良^カト云清正達ンテ其
境ニハリ一城ヲ攻テ之ヲ拔ク既ニシテ清正兵
ヲ鏡城ニ還ス二十日ニシテ始テ達ス明既ニ敗
報ヲ得テ議シテ曰ク秀吉ノ兵勝ニ衆シテ遠ク
聞フ未タ與ニ鋒ヲ争フ可カラス且ソ知フ議レ
ナ以テ禍ヲ紓フルニ如カスト越人沈惟敬ヲ用
ヒテ和議ヲ圖ラシム惟敬乃チ朝鮮ニ入り書ヲ
行長ニ送リテ和ヲ請フ行長惟敬ヲ城外ニ見ル
惟敬ニ謂テ曰ク明和ヲ欲シハ宜シハ使ヲシテ

日本書紀 卷之三

海ヲ濟ラシム可シ因テ數條ヲ約ス惟敬盡ク其
意ニ順ヒ歸リテ報ヲ取リ五十日ニシテ復來ル
ノ約イテ歸ル乃チ平壤西北十里ノ地ヲ及シテ
俱ニ相踰ユルヲ勿ラシム是ニ於テ我兵平壤ニ
アル者西ニ下ラヌ然レ朝鮮ノ兵竊カニ諸道ヲ
發ス九月清正鏡城ヲ發シ安邊ニ歸ル十月是ヨ
リ先キ大廳鼎ス秀吉因テ京師ニ歸ル此ニ至リ
テ奏請フテ從名古耶ニ赴ク清正既ニ盡ク咸鏡
道ヲ定メ長驅遼東ニ入ラント欲ス行長惟敬ノ
期ヲ過シ至ラザルヲ以テ令ヲ軍中ニ下シ復攻

具フ修メレハ朝劍王書ヲ邪ハシテ急ヲ明一告
ク明ノ群臣議シテ曰惟敬ノ説信ス可カラズハ
天寒ク馬肥タリ宜シク兵ヲ出シテ秀吉ヲ拒ク
可シト李如松ヲ以テ大將トシ六將軍ヲ率ヒテ
東セシム
二十二年五月十三日癸巳正月李如松大軍ヲ帥ヒテ
順安ニ至リ入ラシテ行長ニ告テ曰沈惟敬至ル
和議既ニ成ルト行長喜ヒ一將ヲ遣ハシ二十人
ヲ以テ順安ニ至ラシム如松ノ偏將查太受誘テ
與ニ酒ヲ飲ム酒酣ニシテ伏起ル二十人搏戰走

日本書紀 卷之三

六十六

リテ平壤ニ歸ル行長大ニ驚キ小而如安ラレテ
往テ如松ヲ詰ラレハ如松慰解シテ遣歸ス遂ニ
諸軍ヲ以テ平壤ニ通ル行長急ニ守備ヲ修メ急
ニ鳳山ニ告タ如松兵ヲ分十四門ヲ攻ム我兵殊
死ニ戰フ如松四面ヨリ大礮火箭ヲ用ヒ毒煙成
ヲ蔽フ伐兵大ニ苦シム行長孤城ヲ以テ支フ可
カラス且ツ鳳山ノ兵来リ援ハサルヲ以テ夜潛
カニ家ヲ帥ヒテ城ヲ出テ鳳山ニ至ル大友義統
既ニ遣レテ國都ニ歸ル行長遂ニ退テ國都ニ至
ル立花宗茂平壤ノ急ヲ聞キ赴キ救フ路ニレテ

行長ニ遇フ行長曰ク大敵追至ル遠カラスト宗
茂乃チ數伏ヲ設ケ之ヲ要撃ス敵狼狽シテ走ル
國都ノ諸將使ヲ遣ハン大同江以東ノ諸城ヲシ
テ皆軍ヲ國都ニ歸サシム諸將皆之ニ從フ獨リ
小早川隆景毛利秀毛立花宗茂肯セスレテ曰ク
吾輩カヲ竭シ國ニ報スル固ヨリ今日ニアリ且
ツ明軍勝テ驕ル何ソ懼ルハニ足ント諸將之ヲ
從ス急ナリ乃チ歸ル李如松既ニ一戰平壤ヲ陷
イン遂ニ進ンテ國都ニ逼ル諸將守城ノ事ヲ議
ス宗茂曰城ニ嬰リテ守ラハ大兵合圍接路四絶

焉ンソ久キヲ支ヘン兵ヲ城外ニ出シ戰ヲ決セ
ンニ如カスト隆景亦之ニ從フ隆景乃千宗茂及
ヒ毛利秀包ト李如松ヲ碧蹄館ニ迎ヘ撃ツ大戦
良久呼声天ヲ動カス遂ニ大ニ明軍ヲ破リ斬首
一万殫ント如松ヲ獲ントス比ルヲ追フテ之ヲ
江ニ擠ス溺屍江ヲ蔽フテ流ル如松痛哭退テ坡
州ニ入り狻進戰フコト鉄ハス時ニ清正咸鏡ニ
ナリ秀家之ヲ召還ス清正國都ニ歸ル五月李如
松碧蹄館ノ敗ニ懲リ沈惟敬ヲシテ復和議ヲ圖
ラシム惟敬復國都ニ来リ厚ク行長ニ賂ナフテ

曰太閤朝鮮ノ俘ヲ帰サハ則チ朝鮮ノ二道ヲ割
キ封シテ王トセント行長等素ヨリ不學封王ノ
故事ヲ知ス以爲ラク明ニ王タルノ謂ナリト乃
チ秀吉ニ報シテ曰明人殿下ヲ尊ンテ皇帝トセ
ント欲ス一秀吉乃チ和ヲ許ス國都ノ諸將退テ
慶尚ニ至リ蔚山東萊等十八邑ヲ起シ以テ秀吉
ノ令ヲ俟ツ明主沈惟敬等ヲ遣ハシテ名古耶ニ
至ラシメ秀吉ニ謁ス惟敬還ルニ及ンテ小西如
安ヲ遣ハシ俱ニ往シハ清正屬ニスル所ノ二王
子等ヲ放還ス遂ニ諸將ニ令シテ晋州城ヲ攻レ

日本書紀 卷之三 六十八

六月諸將兵ヲ合セテ晋州城ヲ圍ミ遂ニ之ヲ
拔キ城將徐元禮ヲ斬ル惟敬来リテ行長ヲ見テ
曰公等和ヲ許シ今晋州ノ事アルハ何ソヤ行長
怒テ曰汝和ヲ請フテ明兵益朝鮮ニ入ルハ何ソ
ヤ惟敬答フル能ハス去テ北京ニ至リ李如松以
トヲ召還ス小西如安既ニ遼東ニ至ル明主如安
ヲ疑ヒ敢テ納レズ秀吉如安ノ父レク還ラサル
ヲ以テ以為ラク惟敬已レヲ欺クト既ニシテ大
ニ諸將ヲ召シ會議シテ曰朝鮮ノ事今日ノ狀ノ
如クハ何時定マランヤ吾將ニ自カラ海ヲ航

セトス淺野長政之ヲ諫ム秀吉聽カス既ニレ
テ肥後賊徒峰起スルニ會ス秀吉乃チ親征ラ止
ム八月秀賴生ル秀吉大坂ニ歸ル
二十二年五月十四年甲午正月秀吉大ニ伏見ニ城ク
十二月小西如安燕京ニ至リ明主ヲ見ル明主李
宗誠楊方亨及ヒ沈惟敬ヲ以テ使トシ如安ト俱
ニ發セシム
二千二百五十五年乙未三月伏見城成ル秀吉從リ
居ル夫人淺井氏ヲ淀ニ置ク世呼テ淀君ト云ヒ
月關白秀次罪アリ秀吉之ニ死ヲ賜フ是時ニ當

六十九

リ明ノ三使既ニ朝鮮ノ地ニ入り疑懼敢テ進マ
ス
二千二百五十六年丙慶長ト改元ス正月小西行
長朝鮮ヨリ帰リ和成ルヲ告ク沈惟敬私カニ行
長ニ從ヒ来リ物ヲ秀吉ニ獻シテ去ル四月惟敬
李宗誠ヲ欺テ曰和敗レ日本ノ兵將ニ大ニ来ラ
レトスト宗誠大ニ懼レ遂ニ遁去ル明主遂ニ方
亨ヲ以テ正使トシ惟敬ヲ以テ副トス朝鮮ノ使
者亦從行ス六月明及ヒ朝鮮ノ使者海ヲ濟ル我
諸將兵ヲ釜山ニ留メテ凱旋ス八月使者伏見ニ

至ル秀吉朝鮮ノ使者微賤ナルヲ以テ責テ之ヲ
見ス九月秀吉明使揚方亨沈惟敬ヲ召シ見ル惟
敬封冊金印冕服ヲ奉ツル翌日秀吉使者ヲ饗ス
僧兼兌ヲシテ冊文ヲ讀マシム文中汝ヲ封シテ
日本國王トスルノ語アリ秀吉大ニ怒リ而書ヲ
裂テ曰吾日本ヲ掌握ス王タラント欲メハ則チ
王タラシ何ソ彼ノ封ヲ待レマ且ツ吾ニシテ王
タラハ天朝ヲ如何ント行長ヲ召シテ之ヲ誦メ
即夜加藤清正等ヲシテ明韓ノ使者ヲ逐ハシム
遂ニ令ヲ西南四道ニ下シテ兵十四万人ヲ發シ

明年二月ヲ以テ悉ク名古耶ニ會セシム以テ再
クヒ朝鮮ヲ伐ツ
二千二百五十七年丁酉正月小早川秀秋ヲ以テ元
帥トシモ利秀元將田秀家之ニ副タリ黒田孝高
ヲ以テ參謀トス西先鋒及ヒ諸將皆前役ノ如シ
兩先鋒既ニ海ヲ濟リ行長ハ釜山ニ軍レ濟正ハ
西生浦ニ軍ス朝鮮前役ニ懲リ所在奔竄ス二月
秀秋等釜山ニ至リ山海ノ形勢ニ因リ壘砦ヲ列
シ以テ根據ノ地トス明使既ニ明ニ歸ル明大ニ
驚キ獲大ニ兵ヲ募リ邢玠楊鎬麻貴等ヲ以テ將

トシ率ヒテ東下セシハ七月水軍ノ將藤堂高虎
脇坂安治加藤嘉明等唐嶋及ヒ閑山嶋ヲ攻テ大
ニ韓將元鈞ヲ破ル既ニシテ明將楊鎬等至ル元
鈞ヲシテ進ンテ釜山ヲ擣シム八月行長元鈞ヲ
絶影嶋ニ撃テ大ニ之ヲ破リ鈞ヲ斬ル進テ南海
順天ヲ陷イレ豆恥津ヨリ上陸シ清正ノ兵ト合
シ黄石城ヲ攻テ之ヲ取ル乃チ二道并ヒ進ンテ
南原ヲ攻ム守將楊元城ヲ棄テ走ル我軍進シテ
全州ニ至リ遂ニ國都ニ入シコトヲ議ス韓王水
陸軍皆敗ル、ヲ聞キ李定國等ヲシテ三道ノ水軍

ヲ統へ錦嶋ニ至ラレシヲ我將菅正陰ト碧波亭下ニ戦フ正陰敗死ス舜臣因テ古今嶋ニ據リ我水軍ヲ拒ク毛利秀元黒田長政等ノ一軍進シテ國都ニ迫ル九月明將解生揚登山等ト稷山ニ戦フテ大ニ之ヲ破ル此ニ於テ明軍國都ニアル者敢テ出テス我軍亦持重シテ進マス天漸ク寒シ十月清正退テ蔚山ヲ守ル行長退テ順天ヲ守ル諸將營ヲ連テ釜山ト声援ヲ為ス十一月明將邢珣等既ニ韓ニハリ都城ニ會シ戦ヲ議ス乃チ揚鎬麻貴ヲ以テ將トレ軍ヲ分テニトシ諸道ノ援

路ヲ絶チ大兵蔚山ニ集マル清正淺野幸長ト堅ク之ヲ守ル明將令ヲ下シ戦ヲ休シ長圍ノ策ヲ為シ我汲道ヲ絶シ城兵飢渴皆紙ヲ食ヒ土ヲ煎馬ヲ殺シテ其血ヲ飲ミ馬盡キテ乃チ溺ヲ飲ミ僅カニ飢渴ヲ防ク天大ニ雪フリ寒殊ニ甚シ兵卒或ハ指ヲ墮スニ至ル諸將蔚山ノ急ヲ聞キ秀秋及ヒ毛利秀元黒田長政等道ヲ分テ赴キ救ヲ行長亦海上ヨリ之ニ會ス
二十二年五十八年戊辰正月揚鎬我軍大ニ至ルヲ聞キ身ヲ挺ンテ先適ル麻貴解生等夜ニ衆シテ



田本野史
卷之三
圍ヲ解テ去ル長政馳テ明軍ヲ尾撃ス清正幸長
門ヲ闕ヒテ突出撃テ大ニ明軍ヲ破ル諸將ノ蔚
山ヲ救フヤ明我空虚ノ覩ヒ一軍梁山ヲ襲フ黒
田孝高撃テ之ヲ破ル一軍釜山ヲ襲フ立花宗茂
般舟ニ撃テ之ヲ走ラス四月秀吉使テ遣ハシ詔
將ヲ諭シ秀秋清正行長島津義弘等十餘將ヲ留
メ其餘尽ク罷メ帰ラシム留ル者分テ諸城ヲ守
ル五月秀吉疾アリ七月秀吉疾篤シ徳川家康ヲ
召シ後事ヲ託シ且大老中老奉行ノ三職ヲ置キ
片桐且元ヲ以テ秀頼ノ傳トシ淺野長政石田三

成ニ命シテ朝鮮ニ往キ兵ヲ救メシム既ニシテ
疾大ニ篤シ將ニ瞑セントス再タヒ目ヲ張テ曰
我十萬ノ兵ヲシテ異域ノ鬼ト為ラシムル勿レ
ト言終テ薨ス是時ニ當リ行長順天ニアリ清正
蔚山ニアリ明將劉綎順天ヲ攻ム行長撃テ之ヲ
却ク九月明將麻貴再々々蔚山ニ逼ル時ニ立花
宗茂釜山ニアリ自カラ請フテ五百人ヲ以テ往
テ清正ヲ援テ元濱ニ至リ明軍五千ニ遇フ曉霧
ニ衆シ撃テ之ヲ破ル遂ニ走ルヲ追フテ進ム或
ハ我黨敵セサルヲ以テ止ム宗茂曰敵ノ馬足乱

田本野史
卷之三

三十三

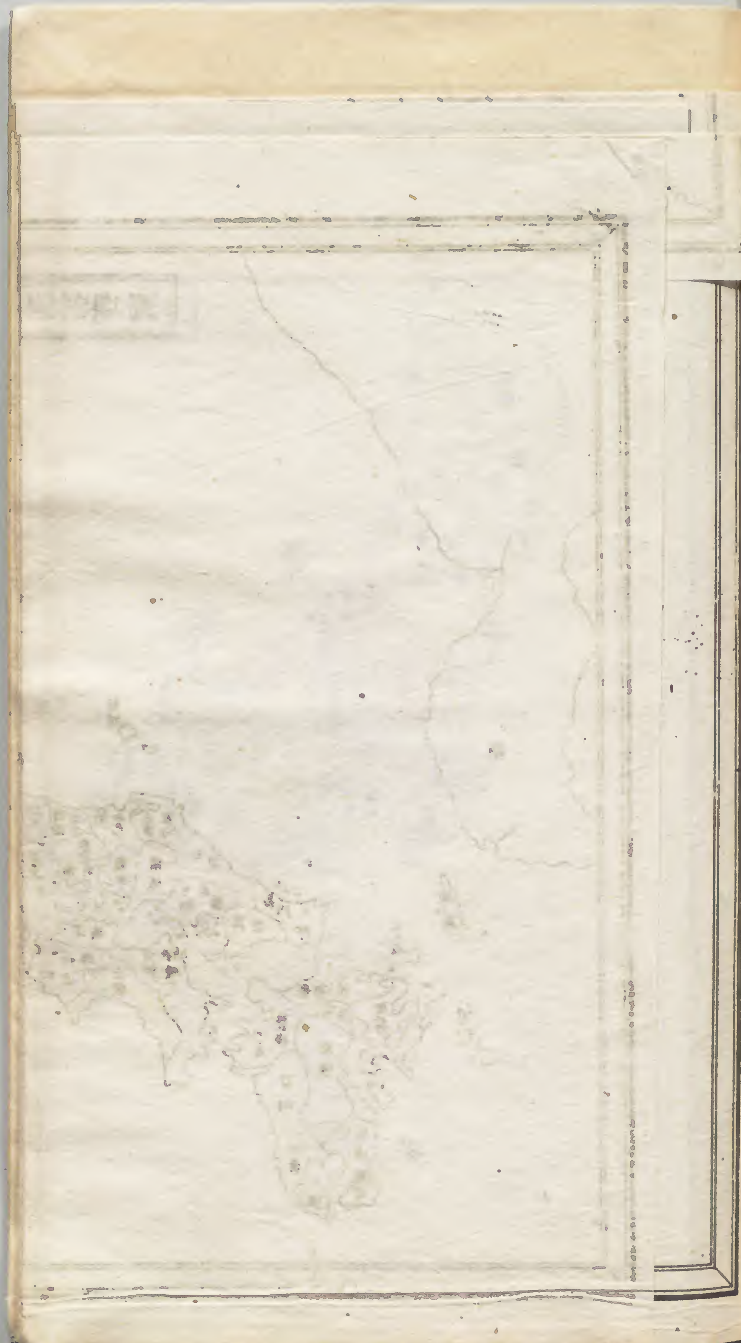
ル追フ可シ追スハ我寡ノ示スナリ追撃後之
ヲ破ル既ニシテ明囚ヲ放チ還シ伏ヲ設ケテ以
テ俟ツ日ク吾寡ヲ示シテ之ヲ誘クナリ夜半明
兵果シテ来リ襲フ伏起リ急ニ之ヲ撃ツ明軍狼
狽シテ走ル明日宗茂蔚山ノ外數十里ニ至リ清
正ト明軍ヲ夾ミ撃テ大ニ之ヲ破ル十月島津義
弘新寨ニアリ明將董一元ト晋江ヲ夾ンテ軍ス
既ニシテ明ノ捕虜我軍ニアル者火ヲ焚テ内應
スルニ會ス我兵饋ミテ驚ク明軍乃チ江ヲ渡リ
テ進ム連リニ數寨ヲ陷イル義弘故サラニ出テ

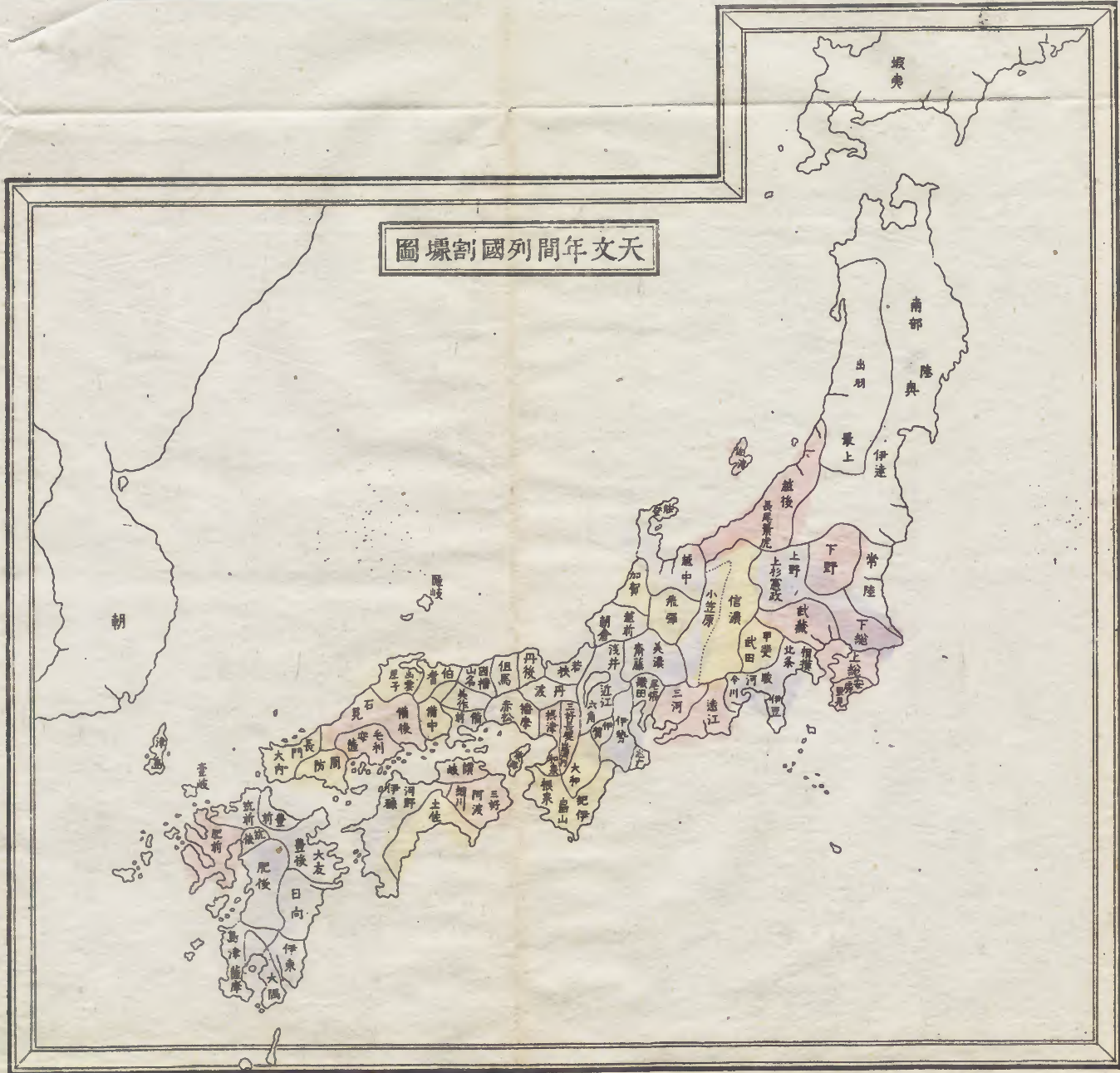
戦ハス明軍之ヲ侮リ直ニ進ンテ新寨ヲ攻ム義
弘兵殊死シ戦フ遂ニ大ニ明軍ヲ破ル奔ルヲ追
フテ望津ニ至ル斬首三萬級既ニシテ秀吉計至
ル諸將相告テ稍帰裝ヲ治ム明謀秀吉ノ没スル
ヲ聞キ明主ニ報告ス明主大ニ喜ヒ奉朝相賀ス
因テ諸將ヲシテ我軍ヲ撃シム諸將新寨ノ敗ニ
懲リ敢テ進マス金山ノ軍已ニ秀秋ニ從テ對馬
ニ歸ル時ニ行長順天ニアリ劉綎從来リテ之ヲ
圍ム清正義弘及ヒ立花宗茂赴キ援ヒ劉綎ヲ撃
ツテ之ヲ走ラセ行長ヲ拔キ還ル明將陳璘及李

七十四

碎臣等兵艦數千艘ヲ以テ我歸路ヲ扼ス義弘行
 長止リ戰フテ之ヲ破リ碎臣等ヲ殺ス明軍敢テ
 復追ハス我軍尽ク對馬ニ達ス十一月軍ヲ整ヘ
 テ名古屋ニ至ル長政三成秀吉ノ遺命ヲ宣フ諸
 將皆泣ク諸將相率ニテ依見ニ詣リ秀頼ニ謁ス

日本書紀卷之三終





天文年間列國割據圖

日本書紀卷之三終

群臣等兵艦數千艘ノ以テ我歸路ヲ拒ス義弘行
 長止リ戰フテ之ヲ破リ舜臣等ヲ殺シ明軍敢テ
 從追ハス我軍今ク對馬ニ達ス十一月軍ヲ整ヘ
 テ名古屋ニ至ル長政三成秀吉ノ遺命ヲ宣フ諸
 將皆泣ク諸將相率ニテ伏見ニ詣リ秀頼ニ謁ス

天正年間群雄爭衛圖



